

自己点検・評価報告書
2018 年度
(平成 30 年度)

嵯峨美術大学
嵯峨美術短期大学
自己点検・評価委員会

2018 年度 自己点検・評価報告書

目次

はじめに	1
評価領域Ⅰ 入学者の受け入れ体制	2
評価領域Ⅱ 教育の内容	3
評価領域Ⅲ 教育の実施体制	5
評価領域Ⅳ 学生支援	8
評価領域Ⅴ 社会的活動	12
＜参考資料＞	
2017 年度学生生活アンケート結果について	15

＜2018（平成 30）年度の自己点検・評価活動について＞

2018（平成 30）年度は、前年度の点検・評価活動をまとめた「2016-2017 自己点検・評価報告書」で報告された「今後改善すべき課題」の解決に取り組んだ。この報告書では、報告された課題への対応策、進捗状況、結果についてまとめる。

また、2017（平成 29）年度に実施された「学生生活アンケート」の結果について考察を加えた資料を併せて掲載する。

はじめに

■建学の精神、教育目的・教育目標、本学の特徴について

【短大・四大共通】

＜課 題＞

建学の精神をふまえた大学の使命、目的について、学内外への周知とともに、教職員の理解を深めるための方策が早急に必要である。

＜対応策・結果＞

本学園共通の建学の精神、学園の使命、教育目標は「大覚寺学園教育憲章」として成文化されている。嵯峨美術短期大学、嵯峨美術大学芸術学部（造形学科、デザイン学科）ならびに大学院芸術研究科の教育目標もそれぞれに明文化し、学生便覧、公式Webサイトなどで学内外への周知に努めている。また、入学希望者に対しても大学案内に掲載し紹介している。

本学園の設立母体である真言宗大本山大覚寺（正式には旧嵯峨御所大覚寺門跡）は、歴史的にも芸術文化との縁が深く、大覚寺が継承してきた華道、書道などの伝統芸術は、本学園の開学以来、正規科目として提供されているほか、新入学生を対象に 4 月に大覚寺で行われるガイダンスでは、大本山大覚寺執行長である理事長より、大覚寺の歴史から本学園との関わりについての講話が行われている。

教職員については、新任の教職員にはガイダンス時に建学の精神等についての研修を行っている。また、2019（平成31）年度より年度当初に全教職員を対象に、大覚寺が始祖と仰ぐ嵯峨天皇と宗祖弘法大師の事績や芸術文化に対する考え方について理事長（大本山大覚寺執行長）から説明を行い、建学の精神の理解を深めるよう、努めた。

評価領域Ⅰ 入学者の受け入れ体制

■評価項目 1 入学者受け入れ方針（アドミッションポリシー）が受験生に対して明示されているか

【短大・四大共通】

＜課 題＞

「入学試験要綱&ガイド」に掲載している入学者受け入れ方針（アドミッションポリシー）を、受験生に明確に示せるよう掲載方法を見直す（冒頭ページに掲載する）。

＜対応策・結果＞

「入学試験要綱&ガイド」冒頭ページに入学者受け入れ方針（アドミッションポリシー）を明確に示した。

■評価項目 2 入学希望者に対して効果的に教育内容等を広報できているか

【短大・四大共通】

＜課 題＞

動画コンテンツを増やし、各領域の教育内容や大学全体の取り組みなどを視覚的かつ広汎に伝える。

＜対応策・結果＞

新しいプロモーションビデオ「美の術で生きていく。」が 2019（平成 31）年 2 月末に完成予定で、芸術学部の教育内容や大学全体の特長を視覚的に伝える内容になっている。短期大学編を 2019（平成 31）年度前半に制作し補完する。さらに社会で活躍する多様な職種の卒業生を映像で紹介する制作も開始しており、2019（平成 31）年度内完成予定である。

■評価項目 3 学生募集活動を効果的に実施しているか

【短大・四大共通】

＜課 題＞

担当領域以外の教育内容を十分に伝えられる教員が少ない。また、入試制度や学費、奨学金、キャリア支援制度等の情報共有が教職員間に徹底されていない。学生募集に関する教職員説明会の回数を増やして対応する。

＜対応策・結果＞

【短大・四大共通】

学生募集に関する教職員説明会は、文科省の入試改革についての FD を 2019（平成 31）年 1 月に実施した。

【短大】

短大では 2016（平成 28）年度、2018（平成 30）年度、2019（令和元）年度に「オープンキャンパスに向けたロールプレイング研修」を行い担当領域以外の教育内容についての理解を深めている。さらに、出張や学内イベントでの教員の不慮の休務に備えて、全教員が同じ内容を説明できるよう、説明マニュアルを作成した。

【四大】

担当領域以外の教育内容、入試制度や学費、奨学金、キャリア支援制度等の情報共有の教職

員間徹底はまだ不十分である。

■評価項目 4 アドミッションポリシーに沿った入学受け入れを実施しているか

【短大・四大共通】

＜課 題＞

入試内容をアドミッションポリシーに沿った人材かどうかを問う内容とし、評価項目にアドミッションポリシーを反映する。

＜対応策・結果＞

概ね実施しているがエビデンスが不十分であったため、2020（令和 2）年度入試からは「学力の 3 要素」および「アドミッションポリシー」を明確な入試判定の評価項目として試験監督要領に明記し徹底を図る。

■評価項目 5 入学定員に沿った適切な学生受け入れ数を維持しているか

【短大・四大共通】

＜課 題＞

入学定員に沿った学生受け入れのため、入学定員超過を防ぐための入試回数設定、入試倍率調整をおこなう。

＜対応策・結果＞

四大において 2017（平成 29）年度入学者のみ定員 120 名の 1.3 倍を超える入学者となってしまうが、他の年度および短大においては入学定員の 1.3 倍以内の入学者数をキープしている。受験生人気が高まり入学定員超過傾向が顕著なため、2020（令和 2）年度入試からは入試回数の削減を実施する。

評価領域 II 教育の内容

■評価項目 2 教育目的を踏まえたカリキュラムポリシーを策定し、周知しているか。

＜課 題＞

【短大】

2018（平成 30）年度を中心にカリキュラム構成の検証を行い、必要に応じて現行開講科目の改廃や新設科目の設置を検討する。また、並行してカリキュラムポリシーについて、記述方式の四大との統一を目指す。

＜対応策・結果＞

四大ではカリキュラムポリシーの改定を 2018（平成 30）年度中に終える予定であるが、短大については教務委員会から美術学科会議に向けてカリキュラムポリシー改定の必要性を周知するにとどまり、具体的な検討段階に進むことができていない。

来年度以降に向けて、2019（平成 31）年 2 月に教務委員会主催の意見交換会を開催し、さらなる現状認識と改定の必要性への理解を深めたいと考えている。また、カリキュラムポリシー改定に向けた検討を 2019（平成 31）年度前半に行い、2020（令和 2）年度に実施する

予定である。

■評価項目 3 授業内容、教育方法および評価方法が学生に明らかにされているか

・シラバスに授業内容、教育方法および評価方法が明示され、その通りに実施されているか

【短大・四大共通】

＜課 題＞

全科目をWeb上で閲覧できるよう整備する。学科組織等と連携し、合意形成と実務作業のスピードを速めて2018（平成30）年6月末までに抜本的な問題解消を目指す。

＜対応策・結果＞

紙媒体から Web シラバスへの移行に伴い一部授業のシラバスの閲覧ができない状態にあったことについて、教務委員会として極めて重大かつ管理責任を問われるべき問題であると認識している。

短大実技系必修科目のシラバスについては、専任教員の協力もあり 2018（平成 30）年度当初から閲覧できる状態でスタートすることができた。一方、四大・実技系必修科目のシラバスについては、教務委員会と造形・デザイン両学科の協力体制の下で、予定通り前期中にキャンパス IS 上の開講科目ごとにシラバスを一本化し、Web 上に開示することができた。

あわせて、実技系必修科目のカリキュラムマップも改定し、より整合的な形でカリキュラムおよび各科目の教育目標をシラバス上に提示することができるようになった。

また、講義系科目において同一開講科目で複数のシラバスが併記されるケースについても、シラバス一本化を行った。

■評価項目 4 授業内容、教育方法に改善の努力がみとめられるか

・学生による授業アンケート集計結果をもとに、各教員は授業内容、教育方法に改善に努めているか

【短大・四大共通】

＜課 題＞

FD活動は、年次計画に沿った企画を立案し実施する。授業評価アンケートの集計結果の活用については、教務委員会で議論を深め、改善サイクルの機能的な運用方策を各学科長とともに検討する。

＜対応策・結果＞

FD 活動については FD 検討部会で年次計画を立て、教務委員会で承認を受けたものの、教員相互の授業参観が実現に至らなかったこと、教職課程 FD を行うことができなかったことなど、予定未消化であったことは遺憾である。

教員相互の授業参観については、来年度実施し、教育の改善サイクルに組み入れるサイクル構築が必要であり、短大および四大におけるアセスメントポリシーの策定と並行して、2018（平成 30）年度中に準備作業を終え、実行段階に移行する予定である。

＜課 題＞

学修行動調査の集計結果を、授業内容、教育方法の改善にいかす。

＜対応策・結果＞

2018（平成 30）年度の学修行動調査については、回答率が 4.7%にとどまった結果、まことに遺憾ながら、教務委員会として分析に堪えないものと判断した。

学修行動調査は本学の学習成果を査定するために必須の指標であり、こうした状況を放置することは許されない。改めて、

- ①同調査が各学生の入学年度と卒業（修了）年度の 2 回行われるという方針を徹底すること、
- ②調査実施時期は前期末とすること、
- ③調査においては学生ポータルでの集計を維持しつつも、授業中に集計を行うことなど、教員の綿密なサポートにより集計が行われるべきであることを確認した。

評価領域 III 教育の実施体制

■評価項目 2 教職員に対し、組織的な FD、SD が行われているか

【短大・四大共通】

＜課 題＞

FD、SD とも規程の整備を進めるとともに、実施後の検証が必要である。

＜対応策・結果＞

1. FD 活動について

【短大・四大共通】

本学の FD 活動は、従前から実施していた教員主体の勉強会に加え、教員と職員とで合同実施した勉強会も含め、FD ワーキンググループを主体として、2017（平成 29）年度は、以下のとおり実施された。

（FD ワーキンググループ主催テーマ一覧）

テーマ	開催日
図画工作科及び美術科教育の現状と課題	2017 年 6 月 14 日
授業外の学習時間の確保について	2017 年 11 月 8 日
キャリア教育についての周辺視座	2017 年 12 月 13 日
知的財産権教育及び盗用等の問題	2018 年 2 月 22 日

FD 活動については、教務委員会に附置された FD ワーキンググループにおいて、教育の質保証を図ることを目的に、企画・実行されている。現在は教務委員長を中心としたトップダウン型の FD 活動となっているが、2018（平成 30）年度中に規程の改正を行い、教務委員会から独立した組織として再編成する予定である。

2. SD 活動について

【短大・四大共通】

本学の SD 活動は、常任理事会で当該年度の実施方針・計画を策定し、でき得る限り教職員全員が参加する教授会終了後に研修を実施することにより、大学設置基準に沿った SD 活動を展開している。また、教職員の資質向上および教職員間の交流を図るため、京都精華大

学との共同でSD研修を実施した。

(大学主催SDテーマ一覧)

テーマ	開催日
学生募集勉強会	2017 年 4 月 20 日
学生相談の報告と問題点	2017 年 5 月 17 日
3つのポリシーに基づく自己点検・評価報告と第3期の認証評価の内容について	2017 年 7 月 5 日
大学改革と教員評価の導入について	2017 年 7 月 12 日
大学におけるハラスメントの対応事例について	2017 年 9 月 20 日
大学におけるハラスメントの対応事例について (京都精華大学との合同SD)	2017 年 9 月 22 日

SD活動についても、常任理事会で計画・実施するトップダウン型のSD活動となっているが、2018（平成30）年度中に規程を制定し、新たにボトムアップ型の組織を立ち上げる予定である。

■評価項目（追加） 研究環境が整備され、適切な運営・管理が行われているか。

【短大・四大共通】

＜現状・課題・改善策＞

研究環境の充実のためには、資金や施設などのハード面と組織や規程整備などのソフト面の両面の強化が必要であると考え。ソフト面では社会連携・研究支援Gを中心に支援体制を整えており、適切に運営されているが、ハード面については、学生数の減少に伴う財政悪化により、毎年研究費の支給額を削減せざるを得ず、研究環境が悪化していた。ようやくここ数年財政が回復基調となり、研究費についても増額措置を講じているが、研究費基礎額とは別に、申請制の研究費枠の創設を検討し、研究環境の更なる充実を図っていきたい。

■評価項目3 教育環境が整備・活用されているか

【情報サービス施設・学習環境】

【短大・四大共通】

＜課 題＞

選択授業に用いる演習室、ゼミ室については、老朽化した設備の刷新を一部行っているが、机や椅子など教室備品の更新を進めていく必要がある。

＜対応策・結果＞

2018（平成30）年度は、地震、台風等の災害被害を受け、第6演習室が一時的に使用不可になったことに伴い、教室使用におけるさまざまな緊急措置をとることとなった。しかし、そのことを除けば、現状において教室等の設備で大きな問題は認められない。

情報系授業におけるコンピュータ、サーバ等の老朽化については、デジタル工房の構想が具体化するタイミングを待たざるを得ない状況であるが、来年度は貸出用 WindowsPC とデ

デジタルカメラをそれぞれ新規導入する計画で教務系予算における来年度予算要求を行い、一定の備品更新を行う予定である。

【附属図書館】

【短大・四大共通】

<課 題>

インターネットの普及により参考資料の閲覧を図書館で行う必要がなくなったことにより、図書館の利用者数は年々減少の傾向にある。しかし、インターネット上で検索できない資料の提供や思索・研究のための図書の利用を促せば、図書館の利用者数は増加すると考える。

<対応策>

そこで本委員会では減少に歯止めをかけ、増加に転ずるよう次のような対策を講じた。

- 1) 学生が必要とするであろう専門書、技術解説書を重点的に購入するようにした。
- 2) 教養ゼミの各受講生が図書館で専門領域に役立ちそうな専門書や興味深い図書を探し、書評・推薦文を書かせるという課題を行った。
- 3) ビブリオバトル（書評を発表し、議論するコンテスト）を試験的に実施した。

<結 果>

1) 新しく購入した図書を含め、図書の利用状況は下の表で示しているとおり、4月から10月にかけては入館者数、貸出冊数ともに前年度より伸びたが、11月以降は利用者数が減り、結果的には本年度の図書館利用者数は13,455人（前年度13,646人）であり、貸出し図書数は6,679冊（前年度6,843冊）となった。

新規購入図書についての広報が不十分であったことと、図書館に行く時間的ゆとりがなかったことなどが原因ではないかと考えられる。

ただし、一日あたりでみると、入館者数は58.8人（前年度56.9人）、貸出図書数は29.2冊（前年度28.5冊）と若干増加している。

【入館者数・貸出し件数の統計】

	開館日数		入館者数		貸出冊数	
	2017 年度	2018 年度	2017 年度	2018 年度	2017 年度	2018 年度
4 月	23	23	1922	1935	807	791
5 月	22	21	2110	2130	743	786
6 月	25	23	1988	1595	869	690
7 月	25	23	1722	1945	978	932
8 月	12	8	214	359	185	229
9 月	25	23	954	980	488	533
10 月	21	23	942	1178	635	701

11 月	24	23	1250	1169	752	664
12 月	20	19	1123	920	686	600
1 月	20	20	804	791	421	526
2 月	23	23	617	453	279	227
合計	240	229	13646	13455	6843	6679

2) 教養ゼミの担当者によっては書評・推薦文を授業中に発表させるなどして、それを読んで図書館に赴き、その本を読んだ学生もいたようである。しかし、全体としては取り組みが不十分であったクラスもあった。各受講生が書いた書評をクラス全体で共有できるようにすべきである。

3) ビブリオバトルについてのインフォメーションが不十分であったことと、締切日を1月末に設定したことが原因し、応募者はわずか1名であった。今後は前期にインフォメーションを行い、夏期休業期間明けに締め切りを設定するなどして、応募者の大幅な増加を図りたい。

【附属博物館・ギャラリー】

【短大・四大共通】

<課 題>

(ハード面) 設備のメンテナンスおよび備品の更新については、長期的な整備計画を立案する。(ソフト面) 年数回の使用法レクチャーを開催する。

<対応策・結果>

(ハード面)

各年度の予算状況が異なるために計画の立案には至らなかった。しかしながら、設備に関しては収蔵庫環境の改善(扉の加工)、荷解室の大幅な整理を行い、使い勝手が向上した。

(ソフト面)

学年暦との絡みもあり 2018(平成 30)年度前期に 1 回だけ開催することができた。短大・四大それぞれ数名の学生の参加があり、設備や展示具の使用法についてレクチャーを行った。実技系教員からはあまり教えられていないようでかなり役だった様子であった。

評価領域 IV 学生支援

■評価項目 1 入学に関する支援が行われているか

【短大・四大共通】

<課 題>

要配慮学生の情報収集の早期化(オリエンテーションまで)を検討し、具体的な施策を講じ

る。

＜対応策・結果＞

入学式時に入学生より健康調査票を提出させ、要配慮の可能性があると思われる学生に対し順次面談を行ったうえで、必要であれば配慮申請をさせるという、これまでの実施方法に対する具体的な改善方法の検討が進まず、オリエンテーションまでの情報収集はできていない。

■評価項目 2 学習支援が組織的に行われているか

【短大・四大共通】

＜課 題＞

教職員間での学生情報の共有システムの充実を図るほか、下記 2～6 までの対応策の実現を目指す。

＜対応策＞

1. 教職員間での学生情報の共有システムの充実。これは学生カルテなどをより充実したものに進化させ利用拡大を図る。
2. GPA、単位習得状況、授業アンケート、学生カルテ情報等のデータを総合的に整理・分析をして、データからの把握をおこなう。
3. 各学科、分野による支援体制および支援方法の構築。
4. 上記の情報の精査、検討機会の設定。
5. SA、TA の充当を拡大していくための制度設計の検討
6. 教務との連携を図り、補講の科目の編成。

以上のようなことが考えられるが、実現化を目指すためには職員の増員が不可欠である。

＜結 果＞

1.学生情報の共有システムの充実について

学生カルテの運用を開始して 4 年になるが、短大・四大とも学生カルテが有効活用されているとはいえない。四大に関しては未だ記入する教員が少数であり、記入していても途中で中断しているケースも散見する。一方、短大に関しては教員の協力も一定得られており、記入率は高くなっているが、成果を出すまでには至っていない。今後学生カルテの運用方法を見直し、記載内容の検索が可能となるようマニュアル化を図るなど、運用の改善を行う。

3.各学科、分野による支援体制及び支援方法の構築

2019（平成 31）年度より 1 年次生を対象に、学生の相談窓口を増やすことを目的として、実技系教員と、教養ゼミ担当教員を担任とする複数担任制をとるとともに、職員は昼の休憩時間に相談室を開設し、輪番制で学生相談を受け付けることとした。

また、学生の情報を教職員間で共有し、支援を必要とする学生に対し早期対応ができるよう、学生カルテへのフィードバックプランを作成することを次年度の学生支援委員会の継続検討案件とした。

他の項目については、具体的な検討段階には至っていない。

■評価項目 3 学生生活支援体制が整備されているか

【短大・四大共通】

<課 題>

【学生食堂、学生寮・下宿のあっせん】大覚寺寮の閉寮に伴う新しい下宿支援策、食堂の利用率低迷への対応策、スカラシップ入試入学生への支援、下宿生への経済的支援、緊急奨学金制度について検討する。

<対応策・結果>

1.大覚寺寮の閉寮

2020（令和2）年度での大覚寺寮の閉寮に伴い、新たな支援策として、嵯峨美生のみが下宿しているマンション等の一棟或いは一部を、大学で借り受け大学寮として運営する、または下宿生に対する家賃補助的な新たな奨学金制度の制定等、具体案も出されているが現在検討中である。

2.スカラシップ入学生への支援

スカラシップ入試学生には、2017（平成29）年度に明確にした経過審査の基準に則り、極めて修学状況の悪い学生に対して、履修登録科目を含めた今後の学修指導を行うとともに、前期はスカラシップ生としての継続を保留し、修業状況の定期的な面談を含む経過観察を行っている。

3.学生食堂の利用率

食堂に関しては、味に対する不満は減少し、メニューの増加を望む声が出てきている。しかし近年の傾向として昼食を持参する学生および近隣のコンビニエンスストアを利用する学生が増加しており、学食利用者数は年々減少傾向にある。

4.奨学金制度

新たな奨学金制度の検討は進んでいない。

2018（平成30）年度の奨学金の受給状況は以下のとおりである。

2018年度 日本学生支援機構 奨学生数

大学

学科	造形学科				デザイン学科				合計				総計
奨学金種別	1年次	2年次	3年次	4年次	1年次	2年次	3年次	4年次	1年次	2年次	3年次	4年次	
第一種奨学金	15	12	4	5	24	21	11	12	39	33	15	17	104
第二種奨学金	18	17	10	10	42	43	32	29	60	60	42	39	201
給付奨学金	3	0	0	0	5	0	0	0	8	0	0	0	8
合計	36	29	14	15	71	64	43	41	107	93	57	56	313

大学院

学科	芸術研究科		合計
奨学金種別	1年次	2年次	
第一種奨学金	1	1	2
第二種奨学金	0	1	1
合計	1	2	3

短大

学科	美術学科		専攻科		合計		総計
奨学金種別	1年次	2年次	1年次	2年次	1年次	2年次	
第一種奨学金	50	24	3	0	53	24	77
第二種奨学金	65	44	5	9	70	53	123
給付奨学金	8	0	0	0	8	0	8
合計	115	68	8	9	131	77	208

2018年度 本学独自奨学金 奨学生数

大学

学科	造形学科				デザイン学科				合計				総計
奨学金種別	1年次	2年次	3年次	4年次	1年次	2年次	3年次	4年次	1年次	2年次	3年次	4年次	
推薦入試奨学金	7	-	-	-	14	-	-	-	21	-	-	-	21
嵯峨美術大奨学金	2	4	1	0	2	0	2	1	4	4	3	1	12
スカラシップ奨学金	9	10	7	2	9	5	4	1	18	15	11	3	47
ワークスタディ奨学金	1	3	1	0	2	4	1	0	3	7	2	0	12
合計	19	17	9	2	27	9	7	2	46	26	16	4	92

大学院

学科	芸術研究科		合計
奨学金種別	1年次	2年次	
嵯峨美術大奨学金	0	1	1
合計	0	1	1

短大

学科	美術学科		専攻科		合計		総計
奨学金種別	1年次	2年次	1年次	2年次	1年次	2年次	
推薦入試奨学金	40	-	-	-	40	-	40
嵯峨美術短大奨学金	8	0	0	2	8	2	10
スカラシップ奨学金	15	10	-	-	15	10	25
ワークスタディ奨学金	1	1	4	2	5	3	8
合計	64	11	4	4	68	15	83

2018年度 他団体奨学金 奨学生数

大学

学科	造形学科				デザイン学科				合計				総計
奨学金種別	1年次	2年次	3年次	4年次	1年次	2年次	3年次	4年次	1年次	2年次	3年次	4年次	
中信育英会奨学金	0	1	1	0	0	0	0	1	0	1	1	1	3
香雪美術館奨学金	0	0	1	0	1	0	0	-	1	0	1	0	2
合計	0	1	2	0	1	0	0	1	1	1	2	1	5

短大

学科	美術学科		専攻科		合計		総計
奨学金種別	1年次	2年次	1年次	2年次	1年次	2年次	
香雪美術館奨学金	0	0	0	0	0	0	0
合計	0	0	0	0	0	0	0

2018年度 私費外国人留学生奨学金 奨学生数

大学

学科	造形学科				デザイン学科				合計				総計
奨学金種別	1年次	2年次	3年次	4年次	1年次	2年次	3年次	4年次	1年次	2年次	3年次	4年次	
私費外国人留学生奨学金	0	0	0	0	0	2	1	1	0	2	1	1	4
合計	0	0	0	0	0	2	1	1	0	2	1	1	4

大学院

学科	芸術研究科		合計
奨学金種別	1年次	2年次	
私費外国人留学生奨学金	6	6	12
合計	6	6	12

短大

学科	美術学科		専攻科		合計		総計
奨学金種別	1年次	2年次	1年次	2年次	1年次	2年次	
私費外国人留学生奨学金	2	1	1	0	3	1	4
合計	2	1	1	0	3	1	4

■評価項目 4 進路支援が行われているか

【短大・四大共通】

<課 題>

1.各学生の最新の情報把握が最重要であり、学生ポータルや就活アプリの導入など最適な方法を検討する。

2.キャリアマップの作成

<対応策・結果>

1.2018 年 2 月に就活アプリ「SAGABiZ」が完成、Google Play Store および App Store からのインストールで提供を開始したところ、2019（平成 31）年 3 月末現在で 120 名以上が

インストールしている。単にインストールしているだけでなく、履歴を確認したところ多くの学生が毎日あるいは 1 日おき程度のかなりの頻度でログインしており、十分に活用していることがうかがえる。ただ、求人情報や説明会情報などこちらから提供する情報を受信するツールとしての活用にとどまっており、学生自身の情報がこちらで把握できるための機能は活用されていない。インストールしてもらうところまでは成功しているので、この機能の利用強化促進をはかり、学生ポータル、各種ガイダンス、正課授業と有機的な連携を図りながら、キャリアマッピングに結び付けていく。

2. マップ上の道順を示す「線」を引く前の、通過すべき「点」を作成している段階にある。2018（平成 30）年度は、そのパーツのひとつである科目区分「キャリアプログラム」の「コンピュータ基礎実習」を、2019（平成 31）年度開講分より Microsoft「WORD」「EXCEL」の資格取得がめざせる内容となるよう変更を行った。引き続き、マップとなるよう整備を進めていく。

【四大】

＜課 題＞

四大 1・2 年次生へのサポートの強化を図る。

＜対応策・結果＞

これまでは人員体制の関係上、卒業年次生の就職活動サポートおよび卒業前年次生のインターンシップサポートといった直接的なサポートで精一杯だったが、キャリア担当者と学生支援担当者が連携して両者が双方を担うことができる体制づくりができつつあり、それにより四大 1・2 年次生に向けた「意識醸成」を目的としたサポートプログラムを企画・実行できる体制が整いつつある。2019（平成 31）年度での実行につなげていく。

評価領域 V 社会的活動

評価項目 1 社会的活動への取り組みが推進されているか

【短大・四大共通】

＜課 題＞

1. 委託事業の内容を精査し、受託研究や共同研究に変更できないかを探る。
2. 芸術センター運営委員会を中心にインセンティブを高めるための方策について検討する。
3. ボランティア活動については、学生表彰の対象にしたり、芸術センター独自の報奨制度等を検討する。

＜対応策・結果＞

1. 依頼内容を見直した結果、共同研究の件数が 10 件に増加した。授業との連動性も高まり、成果があがった。
2. 外部資金を獲得した教員に対する予算上の措置を行ってもらうよう、学長への申し入れを行った。
3. 実質的な活動はできなかった。芸術センター関連の外部での活動はワークスタディでまかなえる状況にあり、ボランティアを募る必要性が薄いのも原因である。

■評価項目 2 国際交流・協力への取り組みの努力がみられるか

【短大・四大共通】

＜課 題＞

1.2018（平成 30）年度に、オーレンセ大学（スペイン）との交換留学事業を再開すべく大学間協定を更新する。

2.英語圏における既存の大学間協定についても、更新作業を進めることとする。

＜対応策・結果＞

2018（平成 30）年度にオーレンセ大学に赴き、大学間協定を更新する予定であったが、その時間を取ることができなかった。そこで、あらためて 12 月に教務委員会付置の国際交流 WG を再結成し、今後の国際交流の在り方、提携更新、新規提携に向けた方針を話し合い、一定の方針を教務委員会で共有するに至った。

来年度以降はこの方針の下で海外連携の件数を増やしていくこととする。なお、英語圏における既存の大学間協定は形骸化し、更新が困難なケースがほとんどであり、オーストラリア等を中心に新規に協定校を開拓することとする。

＜参考資料＞

- ・ 2017 年度 学生生活アンケート結果について

2018.11.20 IR 推進室

2017 年度 学生生活アンケート結果について

実施期間：2017 年 11 月 1 日～12 月 25 日

実施方法：学生部委員会が学生ポータルを利用してアンケートを実施、集計した。

その集計結果をもとに IR 推進室にて分析を行った。

回答数：352 人/873 人中(休学生含む) 回収率：40.2%

内訳

() 内は 2017.5.1 在籍者数

	大学院	芸術学部	短期大学	専攻科
1 年次生	1 (9)	92 (190)	96 (156)	4 (22)
(回収率)	11.1%	48.4%	61.5%	18.1%
2 年次生	1 (12)	46 (126)	57 (132)	0 (14)
(回収率)	8.3%	36.5%	43.2%	
3 年次生		26 (108)		
(回収率)		24.1%		
4 年次生		29 (102)		
(回収率)		28.4%		
計	2 (21)	193 (526)	153 (288)	4 (36)
回収率	9.5%	36.7%	53.1%	11.1%

別紙のアンケート集計結果をもとに、一部「私立大学学生生活白書 2015」と比較検討し若干の知見を得られたので報告する。(回答数が少ない大学院、専攻科は除外した。)

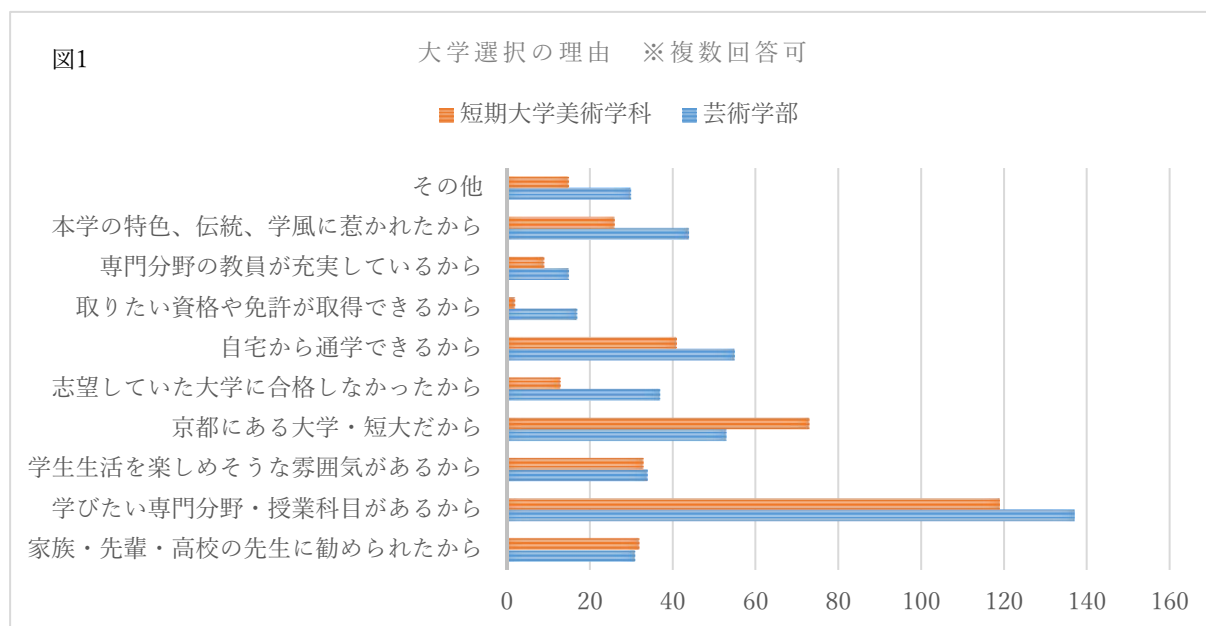
※「私立大学学生生活白書 2015」

(http://www.shidairen.or.jp/blog/info_c/support_c/2015/09/29/18118)

日本私立大学連盟加盟大学で 2014 年 10 月に実施された「第 14 回学生生活実態調査」の分析結果を日本私立大学連盟の学生委員会がまとめたものである。

■進学理由・充実度

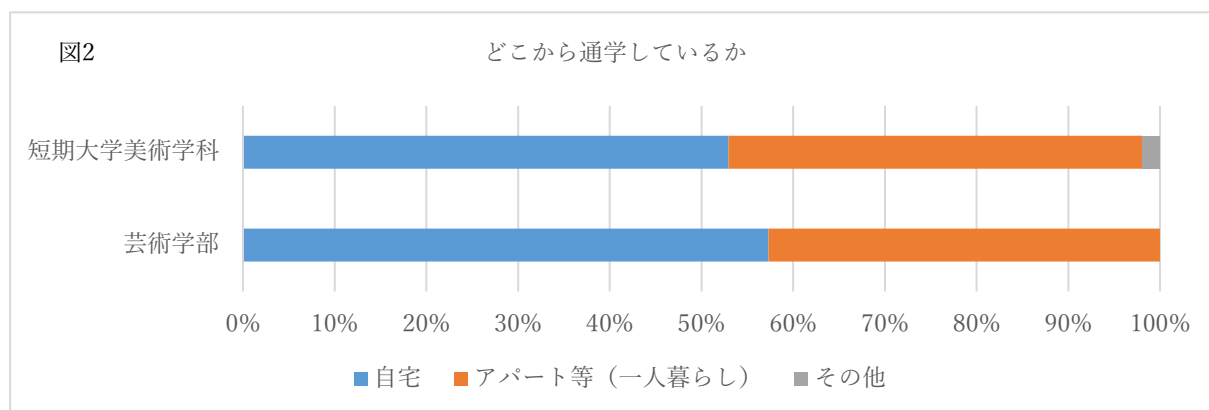
(1) 本学を選択した理由



本学を選択した理由は、四大では1位が「学びたい専門分野・授業科目があるから」、2位「自宅から通学できるから」、3位、「京都にある大学・短大だから」である。

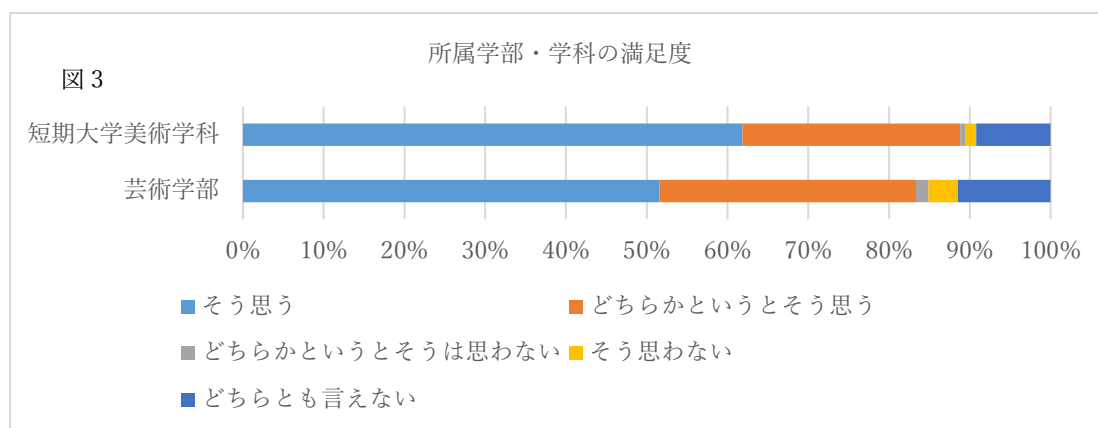
短大においても1位は「学びたい専門分野・授業科目があるから」、2位「京都にある大学・短大だから」、3位「自宅から通学できるから」となっている。(図1)

「自宅から通学できるから」を大学選択の理由とする傾向は全国的に見ても高く、「私立大学学生生活白書 2015」によると、1位は「自宅からの通学が可能だったから」となっており、「自宅から通学できる」は、大学選択の上で重要な要素であると考えられる。

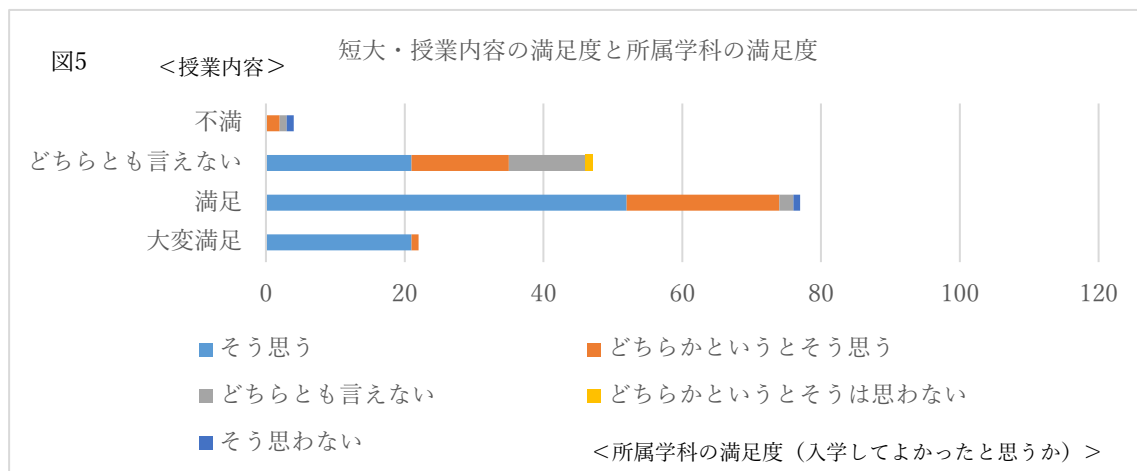
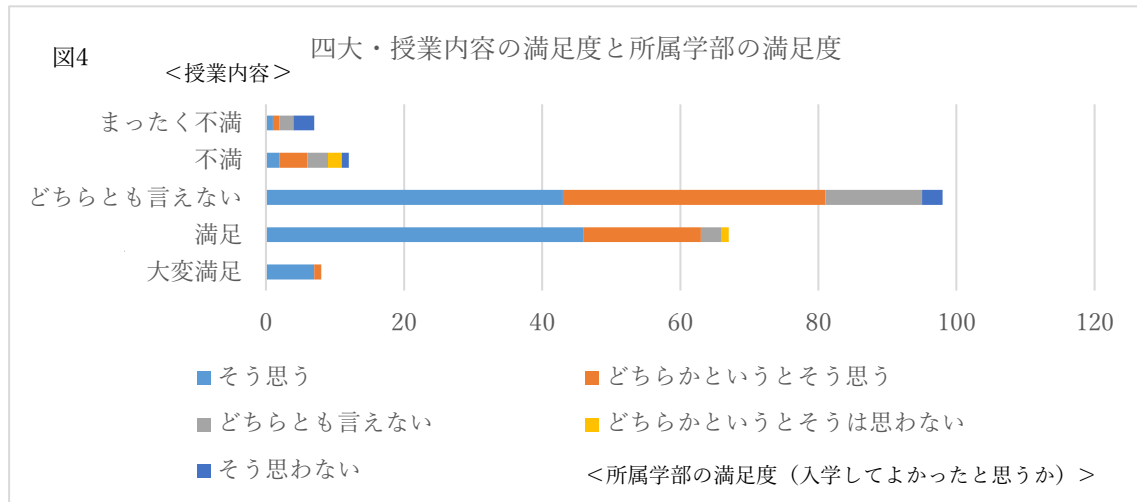


本学の自宅から通学する学生と自宅外学生の比率は上記の表のとおりで、自宅から通学する学生は四大で 57.3%、短大で 52.9%、自宅外通学の学生は四大で 42.7%、短大では 47.1%で、本学でも自宅から通学する学生の比率が若干高いという結果となった。(図2)

(2) 所属学部・学科の満足度



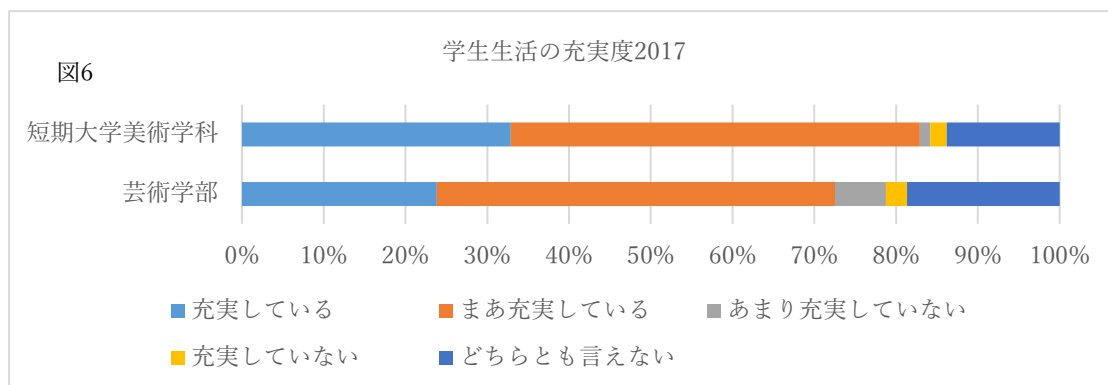
「所属する学部・学科に入学してよかったと思うか」に対し、四大、短大とも、「そう思う」「どちらかというと思う」が80%を超え満足度は高いと考えられる。(図3)



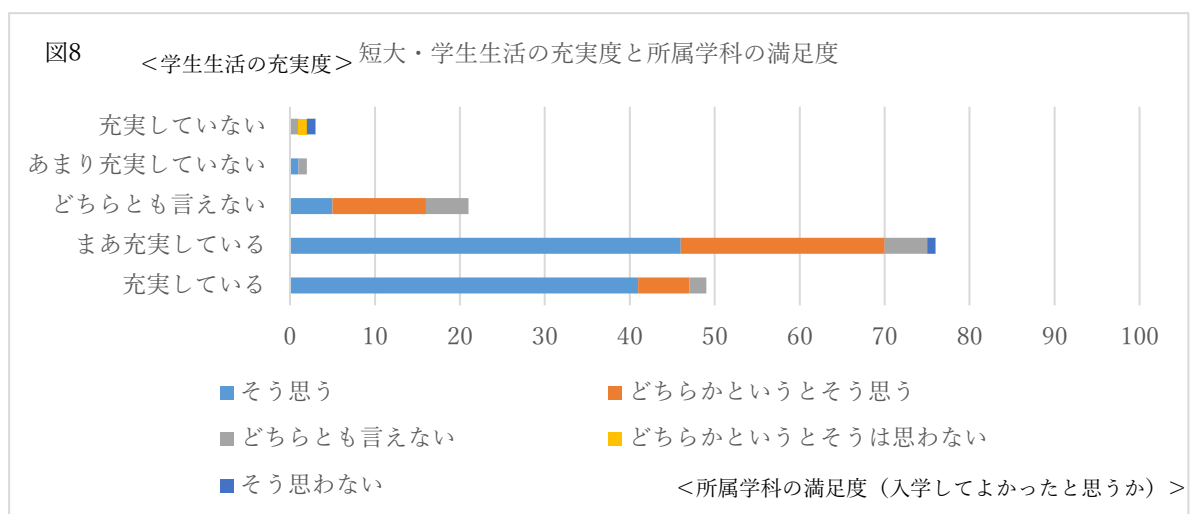
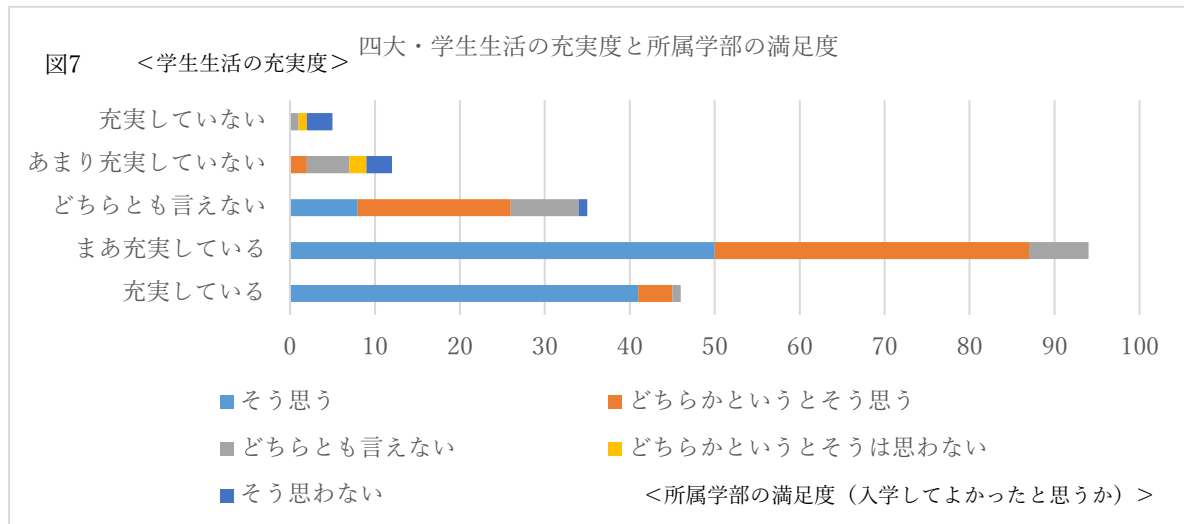
授業内容の満足度と所属学部・学科の満足度をみると、授業内容に満足している学生は所属学部・学科への満足度が高い。ただ、四大は授業内容に関して「どちらとも言えない」と回答した学生が51.2%を占めている。この層の学部への満足度は、現在は「そう思う」「どちらかというと思う」で82.6%となっているが、今後注意が必要であると思われる。（図4）

短大は授業内容に関しては、「大変満足」「満足」で66%となっており、「不満」と回答した学生は2.7%である。「どちらとも言えない」と回答した学生も、74.4%が学科への満足度を、「そう思う」「どちらかというと思う」としており、概ね良好であると考えられる。（図5）

（3）学生生活の充実度

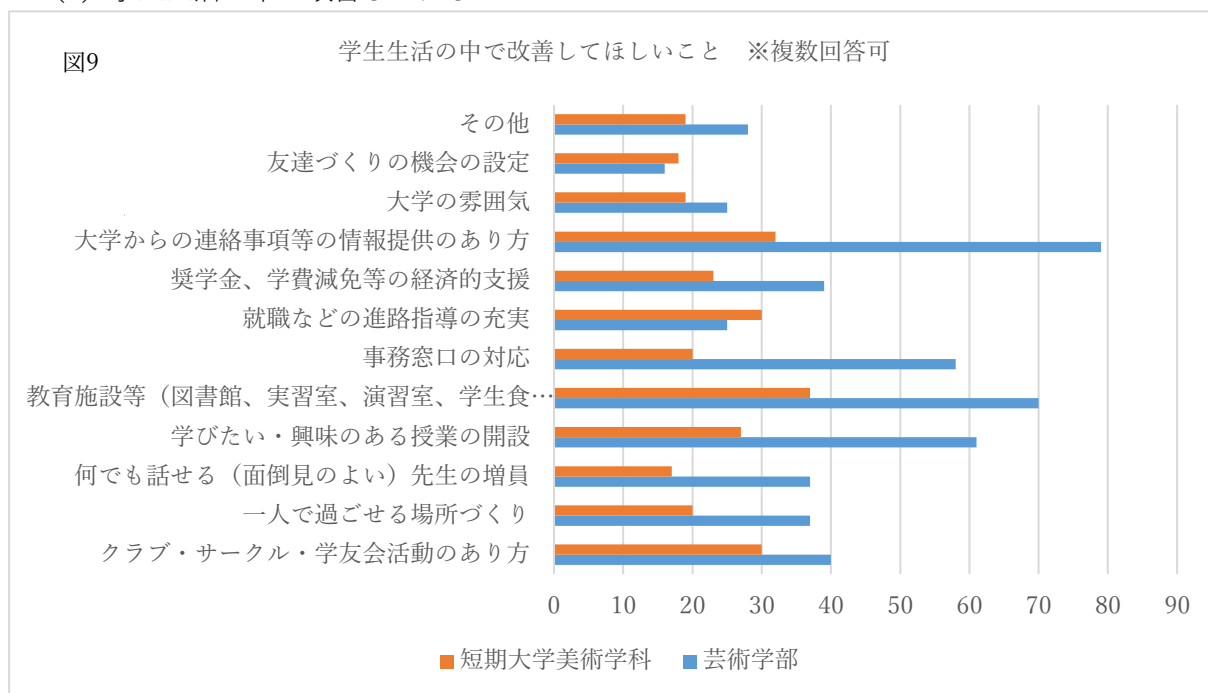


学生生活の充実度は、「充実している」「まあ充実している」が四大72.5%、短大83.0%となっており概ね充実した学生生活を送っていると思われる。（図6）



学生生活の充実度と所属学部・学科の満足度をみると、学生生活が充実している学生は所属学部・学科への満足度が高いと考えられる。(図7、図8)

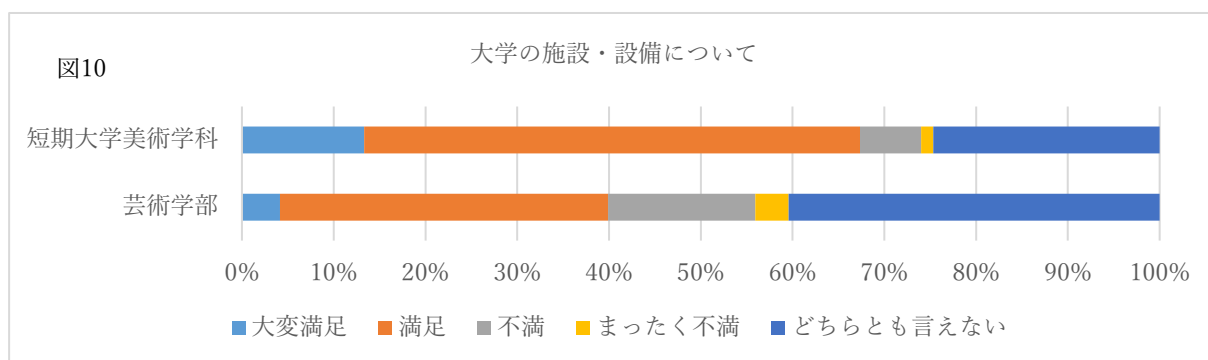
(4) 学生生活の中で改善してほしいこと



四大の改善してほしいという要望の第1位は、「大学からの連絡事項等の情報提供のあり方」、2位は「教育施設等（図書館、実習室、演習室、学生食堂、学生ホール等）の充実」、「「学びたい・興味のある授業の開設」という結果となった。

短大の1位は「教育施設等（図書館、実習室、演習室、学生食堂、学生ホール等）の充実」、2位は「大学からの連絡事項等の情報提供のあり方」、3位は「就職などの進路指導の充実」「クラブ・サークル・学友会活動の在り方」という結果で、順位は逆であるが同じ項目が上位2位を占めた。（図9）

大学からの情報提供の在り方については、今後学生ポータルでの情報発信が充実し、学生に浸透していくことで改善されていくものと考えられる。



改善の要望が高い「教育施設の充実」について、「大学の施設・設備について満足していますか」という問いに対する回答を見ていくと、四大では「大変満足」「満足」が40.0%で、「どちらともいえない」が40.4%と一番高い比率を示しているのに対し、短大では67.3%が「大変満足」「満足」と回答しており、「どちらともいえない」は24.7%である。四大と短大では教育施設・設備に対する満足度に大きな差が認められた。（図10）

図11

実習室の設備や利用方法、利用時間など

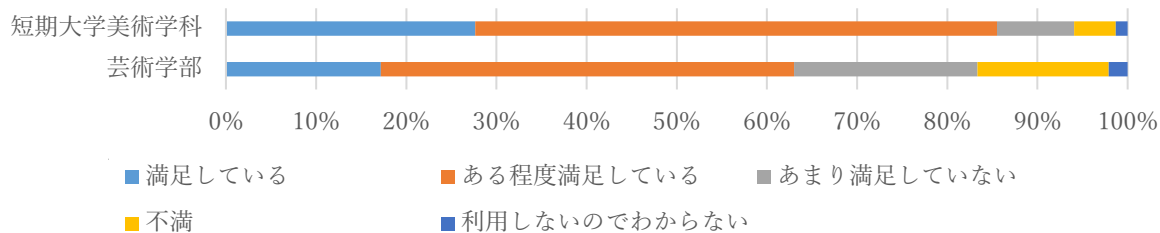


図12

講義室・演習室の設備や利用方法、利用時間

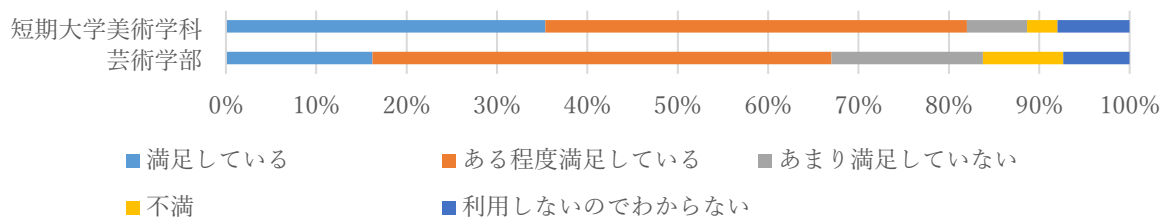


図13

図書館の設備や利用方法、利用時間

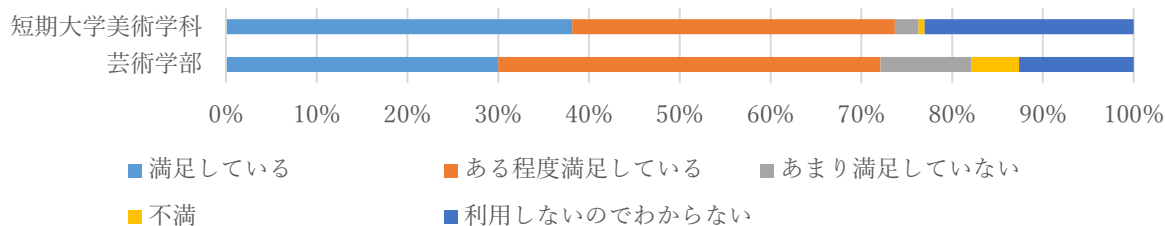


図14

食堂設備や利用方法、利用時間など

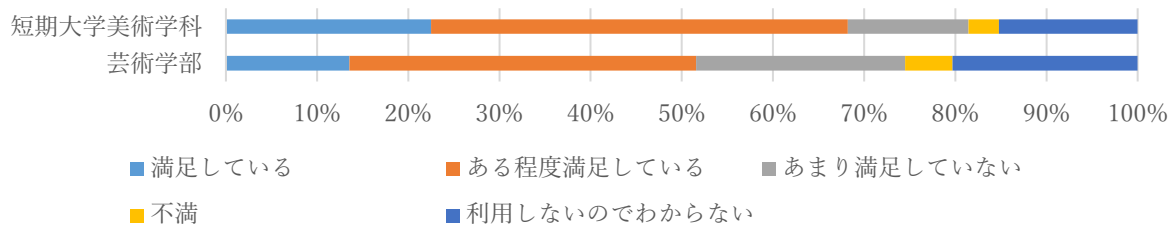
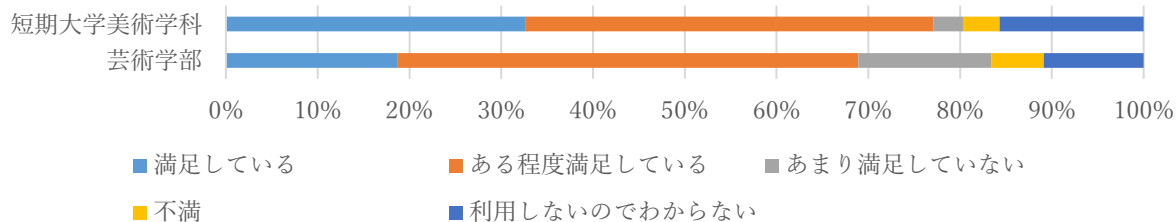
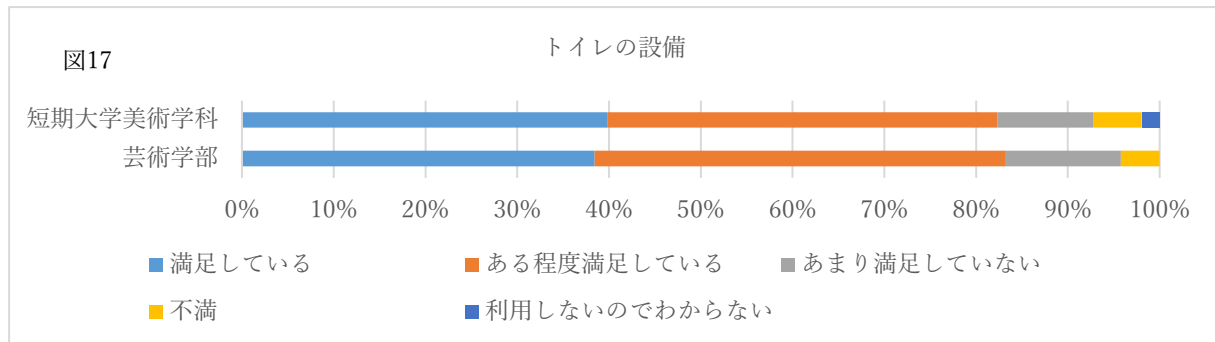
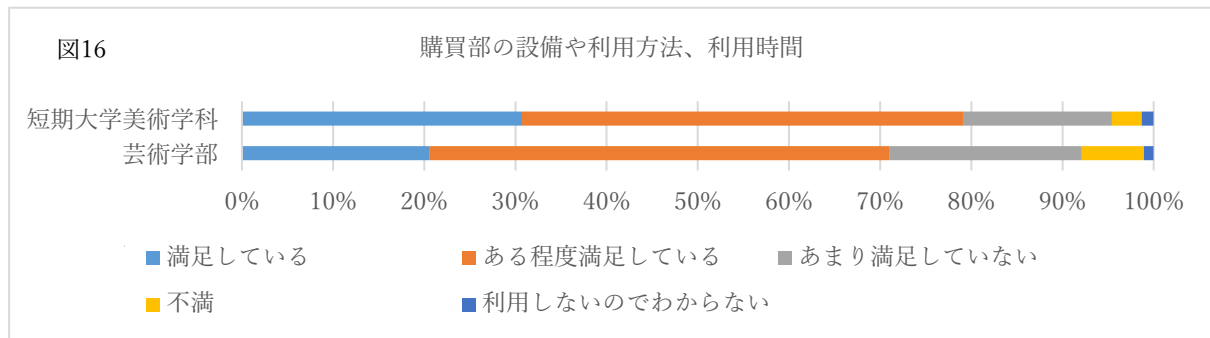


図15

学生ホールの設備や利用法保、利用時間





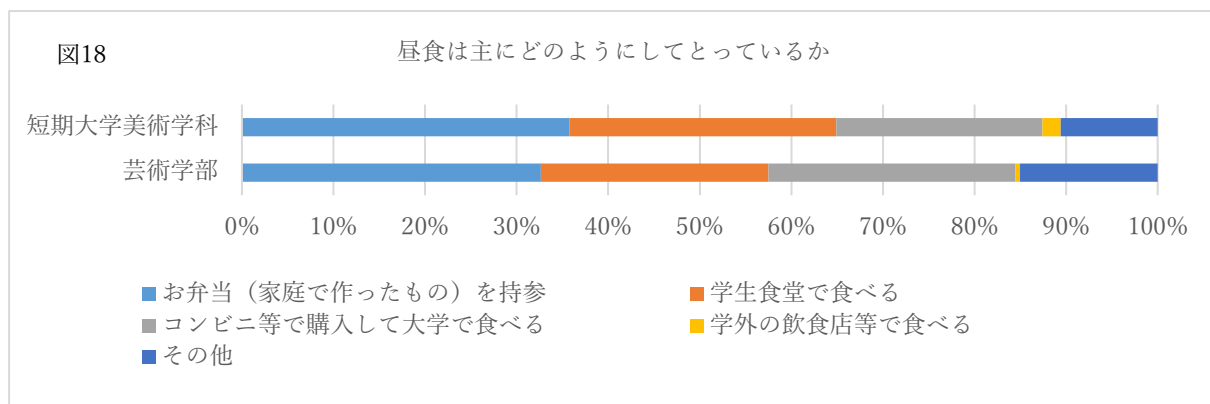
一方で、個々の施設・設備についての設問には、「満足している」「ある程度満足している」が70%を超えている施設が多い。（「利用しないのでわからない」が50%以上の施設を除く）（図11～図17）

その中で70%より低いのは、四大は「実習室」（図11）「講義室・演習室」（図12）、「学生食堂」（図14）、短大では「学生食堂」（図14）となっている。全体的に教育施設に対する満足度は四大の学生の方が低い結果となった。

四大、短大とも満足度が低かったのは「学生食堂」であるが、「利用しないのでわからない」と回答した学生を除くと、「満足している」「ある程度満足している」と回答した学生は、四大で64.7%、短大では80.5%である。

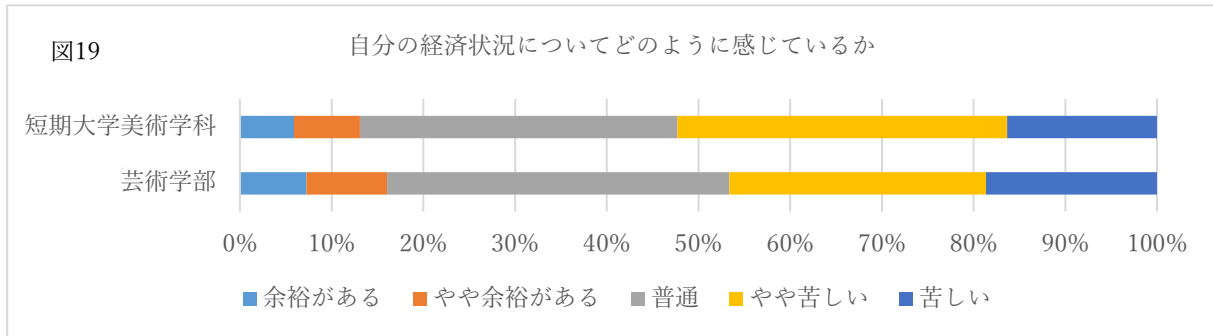
学生部委員会では、定期的に食堂の担当業者と話し合いを重ねているが、今後も改善の努力を継続してゆくことが重要である。また「学生食堂の充実」は、「私立大学学生生活白書2015」でも群を抜いて1位となっていることから、学生にとって学生食堂への期待が大きいことが判明した。

※学生食堂について

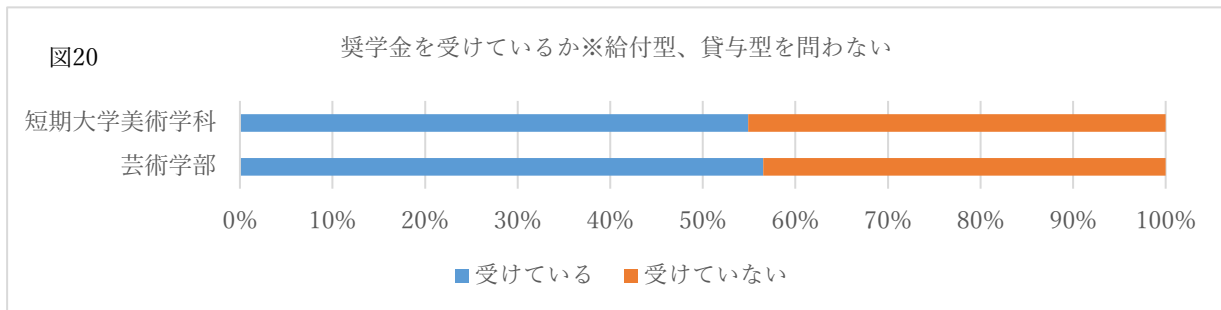


「学生食堂の充実」という要望が強いことは前述したとおりであるが、「昼食をどのようにしているか」への回答では、1位は四大、短大とも「お弁当（家庭で作ったもの）を持参」となっており、「学生食堂で食べる」は四大では3位、短大では2位である。食堂の利用者が減っている、という学生部委員会の報告が裏付けられた結果となった。（図18）

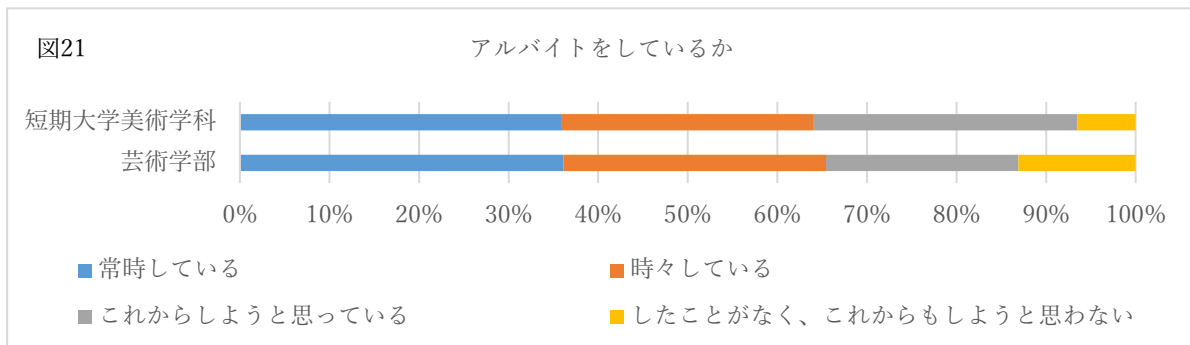
■経済状況



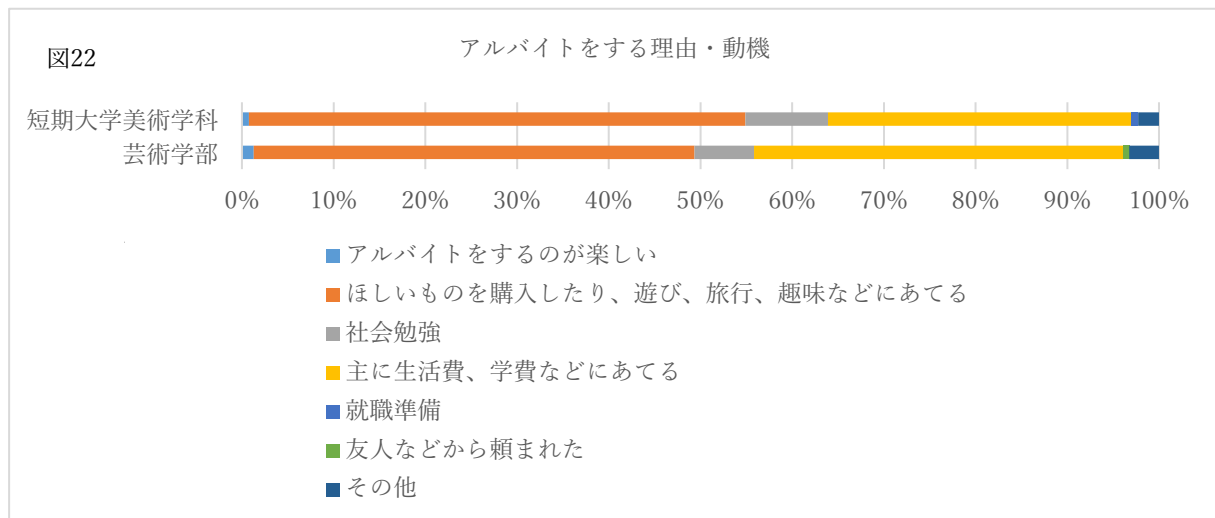
現在の自分の経済状況について、「余裕がある」「やや余裕がある」と回答したのは四大で 16.1%、短大で 13.1%であり、四大で 46.6%、短大で 52.3%が「苦しい」「やや苦しい」と回答した。(図 19)



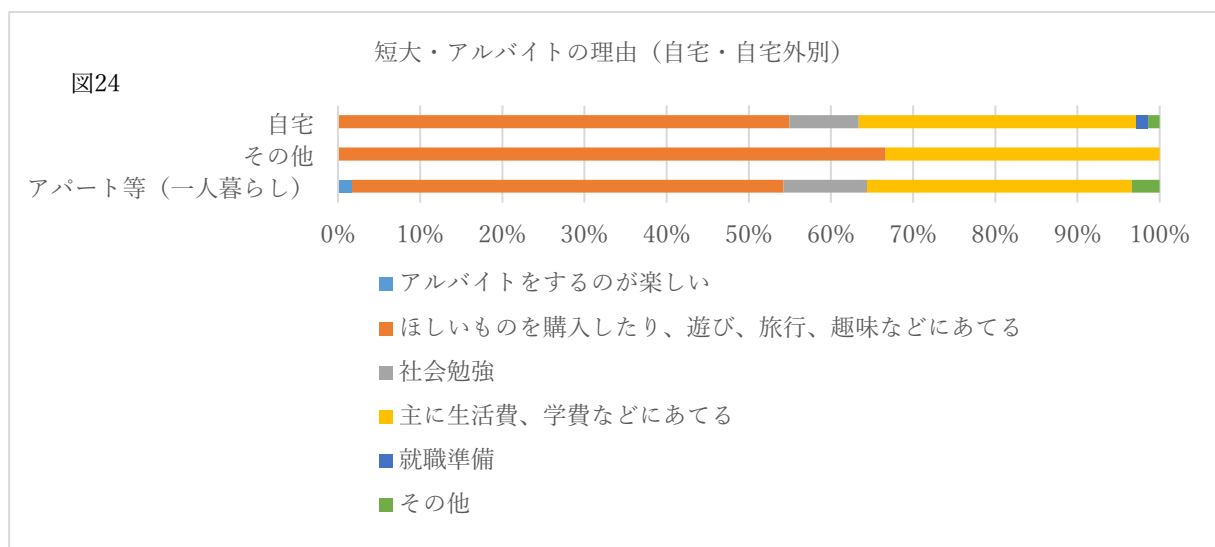
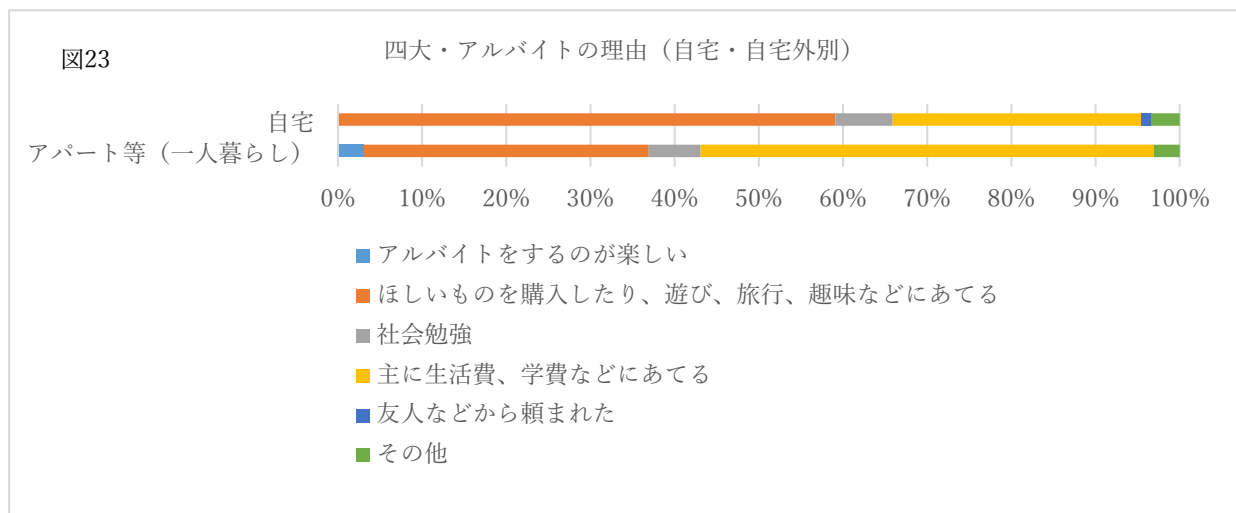
奨学金の状況を見ると、「奨学金を受けている」は四大 56.5%、短大 54.9%で、いずれも 50%を超える結果となった。(図 20)



アルバイトをしている学生（「常時している」「時々している」）は四大で 65.4%、短大で 64.1%となっている。「私立大学学生生活白書 2015」では 73.3%となっているので、全国平均より低い数値である。これは授業時間外も制作に費やす時間が多いという本学の事情が影響していると考えられる。(図 21)

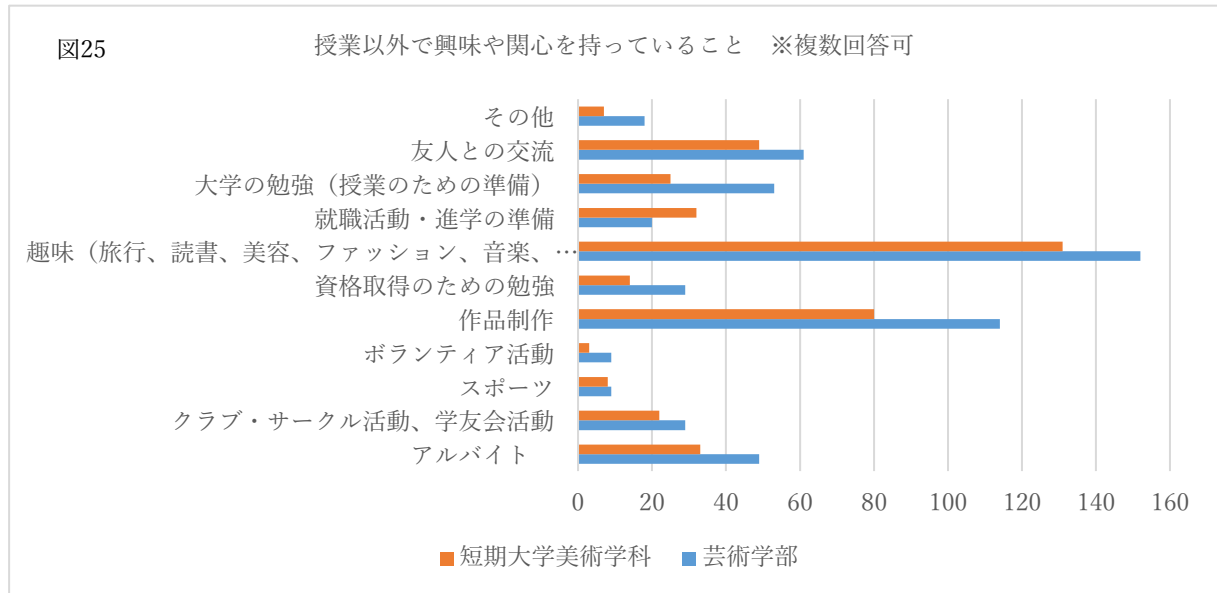


アルバイトをする動機としては「ほしいものを購入したり、遊び、旅行、趣味などにあてる」が四大 (48.1%)、短大とも (54.1%) 1 位で、2 位は「主に生活費、学費などにあてる」(四大 40.3%、短大 33.1%)、3 位は「社会勉強」(四大 6.5%、短大 9.0%) である。「私立大学学生生活白書 2015」でも同様の順位であり、1 位、2 位が高い傾向も共通している結果となった。(図 22)



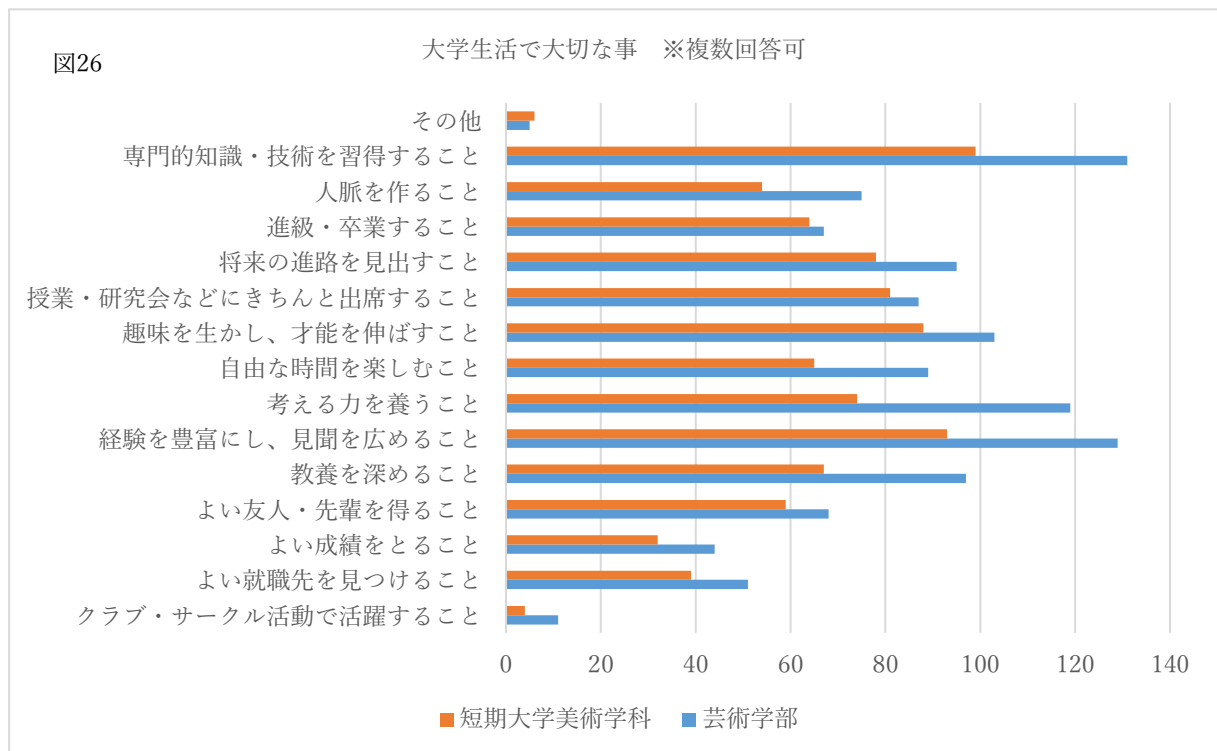
自宅、自宅外通学別にみると、四大は自宅通学の学生の順位は全体の順位と同様であるが、自宅外通学の学生の1位は「主に生活費、学費などにあてる」で、「ほしいものを購入したり、遊び、旅行、趣味などにあてる」と順位が逆になっている。他の動機についても自宅通学の学生よりポイントが低くなっているものが多く、生活のためにアルバイトをしている様子が見える。短大は自宅、自宅外通学の学生ともに1位、2位は全体の順位と同様である。

■大学生生活



「授業以外で興味や関心を持っていること、または時間をかけていることは何ですか」という設問には、四大、短大とも1位は「趣味（旅行、読書、美容、ファッション、音楽、演劇など）」、2位「作品制作」、3位は「友人との交流」となっている。（図25）

「就職活動・進学のための準備」が短大で5位であるのに対し四大は8位で、「就職活動・進学のための準備」は、短大生にとっては切実な関心事であることが明らかになった。

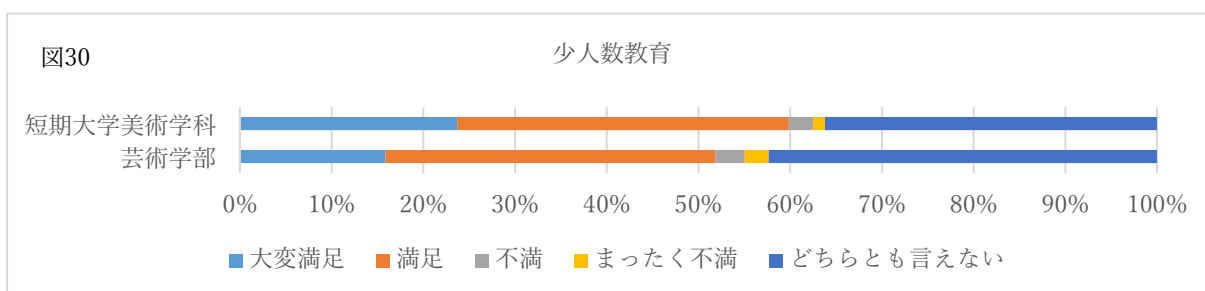
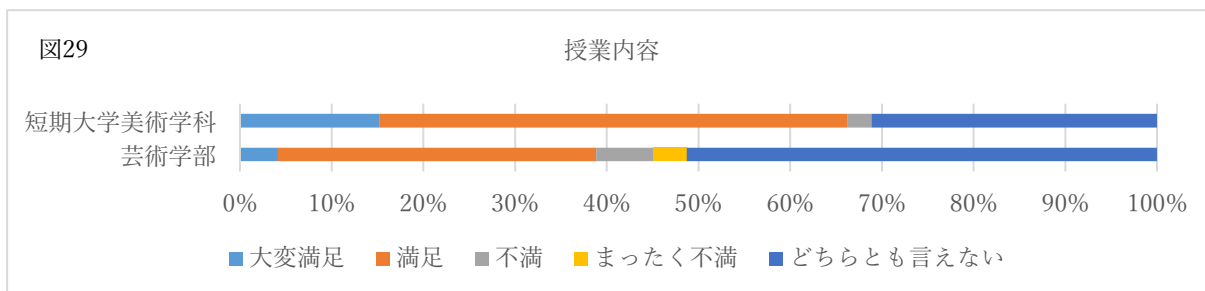
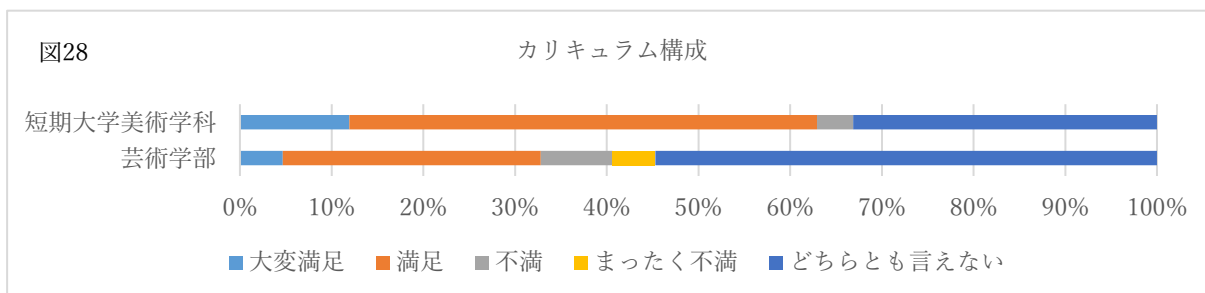
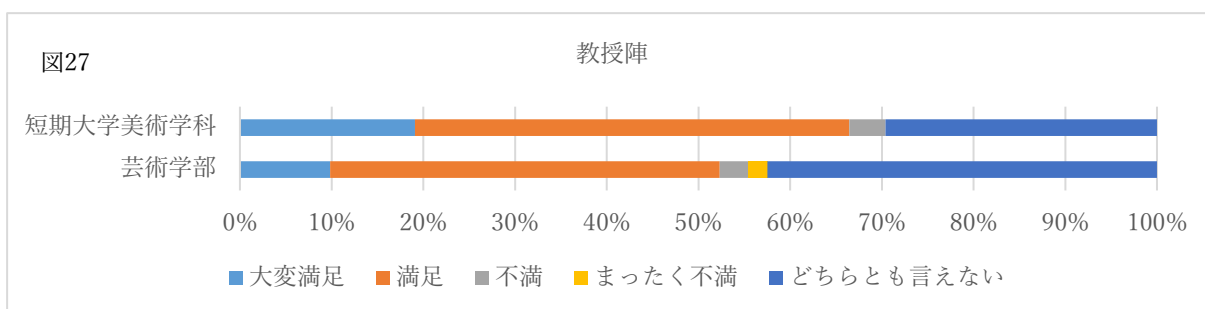


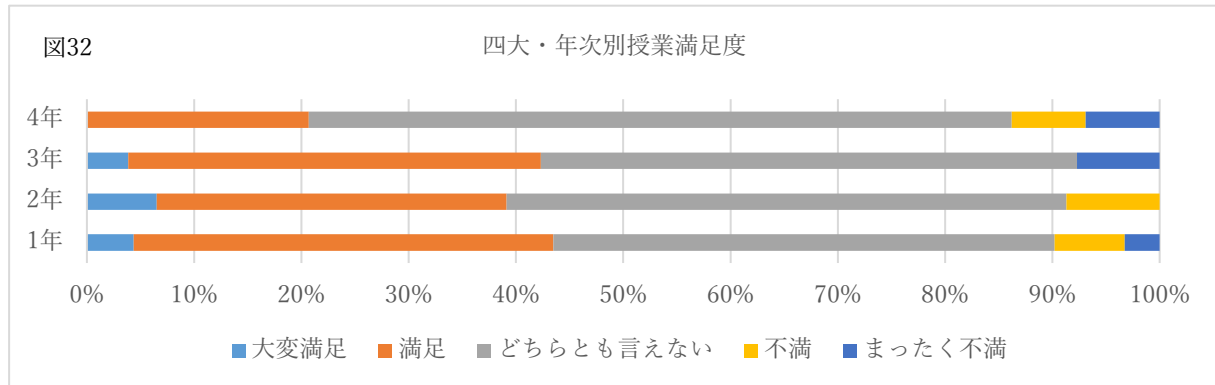
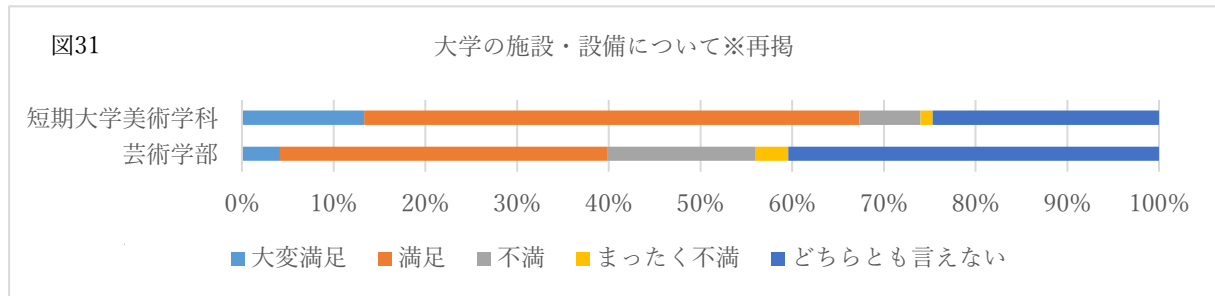
「大学生活で大切だと思っていること」は、四大では1位「専門的知識・技術を習得すること」、2位「経験を豊富にし、見聞を広めること」、3位「考える力を養うこと」となった。

短大は1位、2位は同様であるが、3位は「趣味を生かし、才能を伸ばすこと」で（四大は4位）、「考える力を養うこと」は6位となっている。また、短大で4位の「授業・研究会などにきちんと出席すること」は四大では8位である。（図26）

「私立大学学生生活白書 2015」では、1位「経験を豊富にし、見聞を広めること」、2位「専門的知識・技術を習得すること」で本学と順位は逆であるが、同様の結果となっている。この2項目は2006年、2010年とほぼ変わらないようである。3位は「授業・研究会などにきちんと出席すること」となっており、この項目は「よい成績をとること」とあわせて増加傾向を示しているとのことである。本学でも経年的な変化を観察する必要があると思われる。

■正課教育





本学の正課教育について、「教授陣」「カリキュラム構成」「授業内容」「ゼミなどの少人数教育」「施設・設備」の5項目に対する満足度のアンケート結果は図27～図32のとおりである。

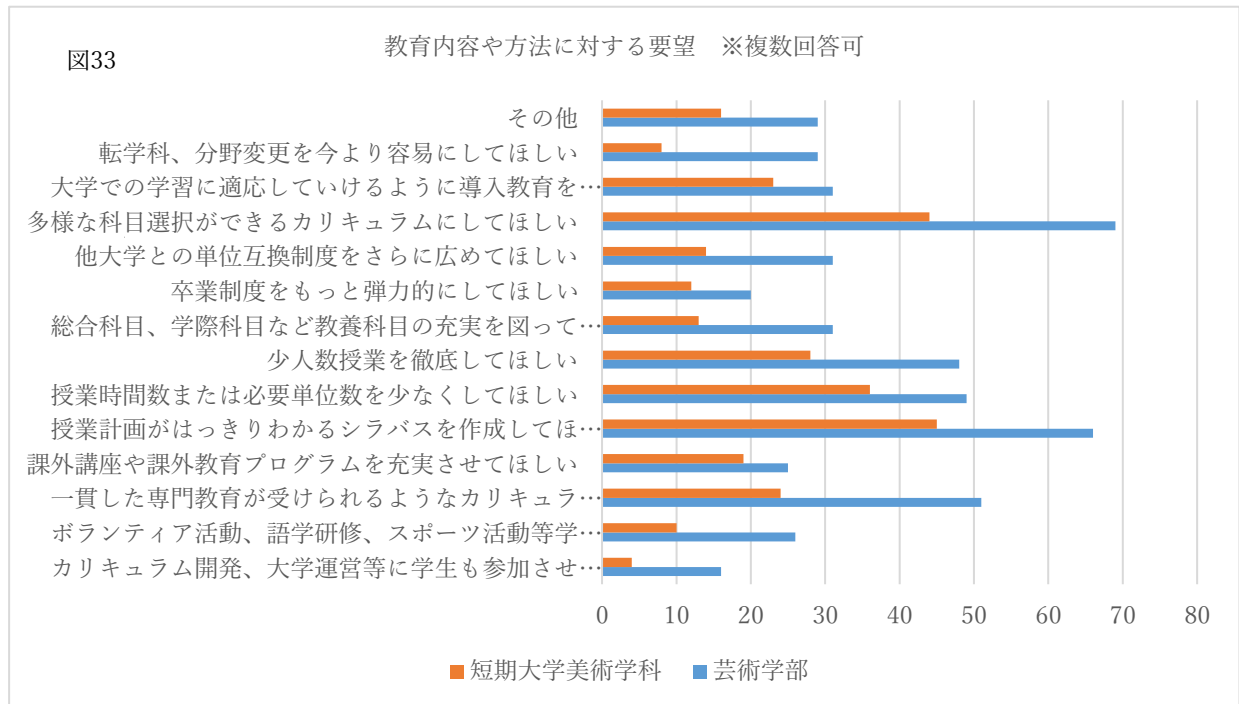
短大においては、5項目とも「大変満足」「満足」と回答した学生が60%を超えているのに対し、四大は60%を超えた項目は1つもなく、「大変満足」「満足」と回答した学生は、「教授陣」52.3%、「カリキュラム構成」32.8%、「授業内容」38.9%、「ゼミなどの少人数教育」51.9%、「施設・設備」40.0%となっており満足度は決して高いとは言えない結果である。

四大の「授業内容」の満足度を年次別にみると、どの年次も「大変満足」「満足」と回答した学生は40%前後で、特に4年次生は「大変満足」は0%、「満足」が20.7%と一番低く、「不満」「まったく不満」と回答している学生は10%を超えている。

また、四大は「どちらともいえない」と回答している学生が多く、特に「カリキュラム構成」は54.7%、「授業内容」は51.3%を占める。

以上の結果から、早急に四大の「授業内容」の満足度を上げることが重要であることが明確になったが、これらの項目も経年的に変化を観察していく必要があると考えられる。

ただ、「授業内容」に関しては、毎年度実施している「授業評価アンケート」の結果を見ると、決して満足度が低いわけではない。「2017 年度授業評価アンケート結果」によると、四大の一般教育科目の満足度の科目平均は4.45（5段階評価）、専門教育科目1は4.06、専門教育科目2選択科目4.25、専門教育科目2必修科目4.33である。すべて4.0以上となっている。毎年度発行されるIR報告書においては、この結果をもとに「特に問題はない」としてきたが、この乖離をどのように判断すべきかについては今後の大きな検討課題である。



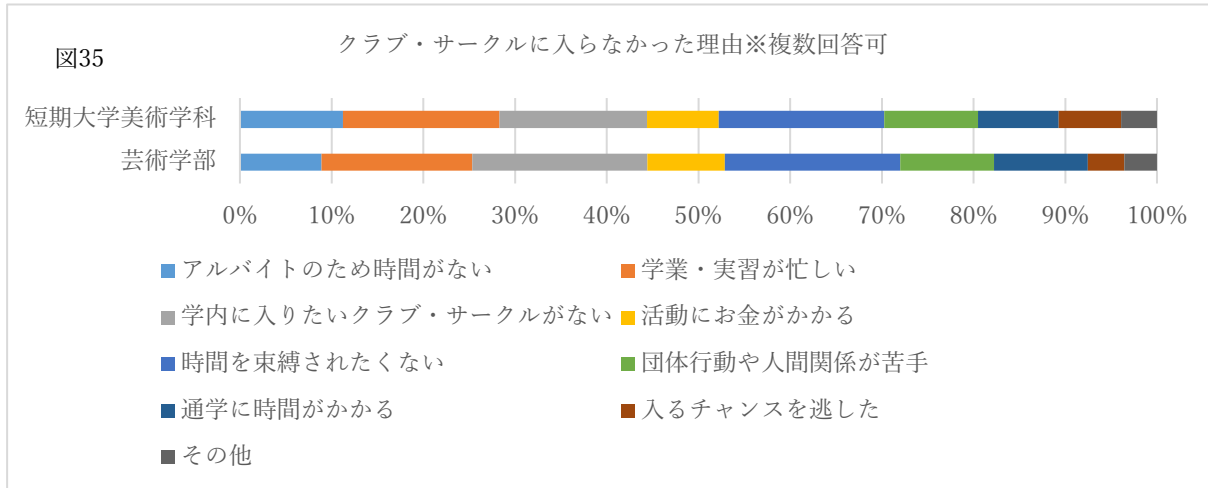
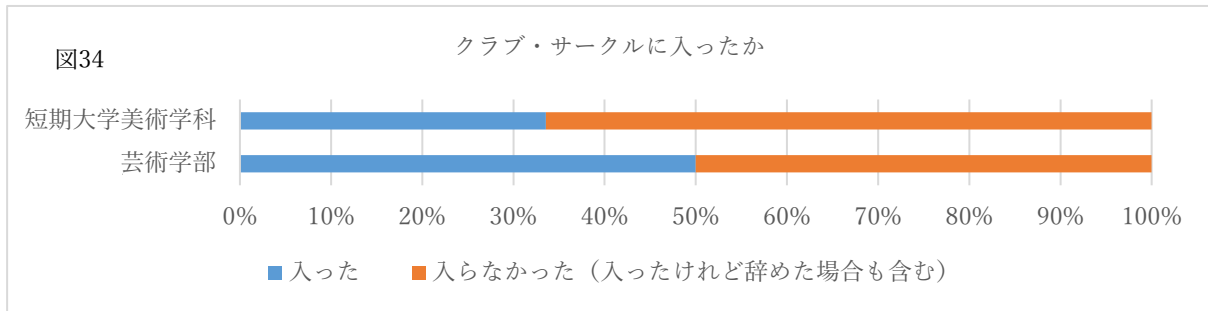
では、「教育内容や方法に対する要望にはどのようなものがあるか」という問いに対する回答を見ていく。四大の1位は「多様な科目選択ができるカリキュラムにしてほしい」、2位は「授業計画がはっきりわかるシラバスを作成してほしい」、3位は「一貫した専門教育が受けられるようなカリキュラムにしてほしい」（短大は5位）であった。

短大の1位は「授業計画がはっきりわかるシラバスを作成してほしい」、2位は「多様な科目選択ができるカリキュラムにしてほしい」、3位は「授業時間数または必要単位数を少なくしてほしい」（四大は4位）となった。（図33）

「授業計画がはっきりわかるシラバスを作成してほしい」という要望についてであるが、シラバスは毎年教務委員会によって記述内容の確認が行われ、年々改善が加えられて充実が図られている。「2017年度授業評価アンケート結果」でもシラバスに対する評価（5段階評価）は、四大では一般教育科目 4.35、専門教育科目 1 は 3.89、専門教育科目 2 選択科目 4.17、専門教育科目 2 必修科目 4.09、短大では一般教育科目 3.82、専門教育科目 3.83、展開科目 4.30、選択演習科目 4.10、専門実習科目 4.28 で決して低いわけではないが、シラバスの充実への要望が四大で2位、短大で1位であるということは、まだまだ改善の余地があると思われる。

「私立大学学生生活白書 2015」では、1位が「多様な科目選択ができるカリキュラムにしてほしい」でこの点では本学（四大1位、短大2位）と共通しているが、2位は「ボランティア活動、語学研修、スポーツ活動等学外での活動も単位認定してほしい」（本学四大11位、短大12位）、3位「総合科目、学際科目など教養科目の充実を図ってほしい」（本学四大6位、短大10位）となっている。本学で要望の強かった「授業計画がはっきりわかるシラバスを作成してほしい」は9位であり、全国的な傾向とはかなり異なったものとなった。

■正課外活動



クラブ・サークル活動への参加率は、四大 50.0%に対し短大は 33.6%で、四大の方が参加率が高い。(図 34)「私立大学学生生活白書 2015」では、「課外活動(クラブ、サークル活動、ボランティア)」への参加率は 70.2%となっていることと比較すると、本学の課外活動への参加率はかなり低い結果となった。(図 34)

では、「クラブ・サークルに入らなかった理由」についての回答を見ると、四大、短大とも 1 位は「時間を束縛されたくない」で、四大では同じ比率で「学内に入りたいクラブ・サークルがない」、第 3 位が「学業・実習が忙しい」となっている。短大は 2 位が「学業・実習が忙しい」、3 位「学内に入りたいクラブ・サークルがない」の順である。(図 35)

「私立大学学生生活白書 2015」では、1 位が「アルバイトと両立できない」、2 位「勉強と両立できない」、3 位「入りたいクラブがない」で、2 位、3 位は共通しているが、本学の 1 位が「時間を束縛されたくない」である点は特徴的である。

また、大学の規模別にみると学生数の少ない大学ほど、「入りたいクラブがない」という声が相対的に多いという指摘がされており、本学でも同じ傾向を示している。

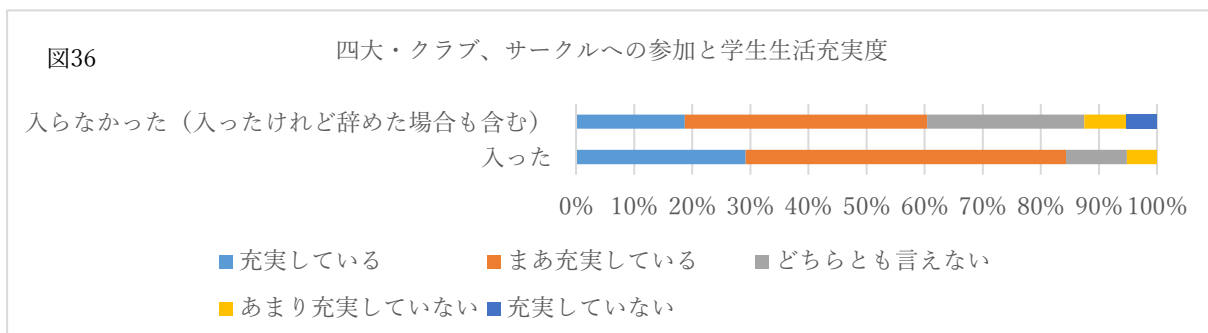
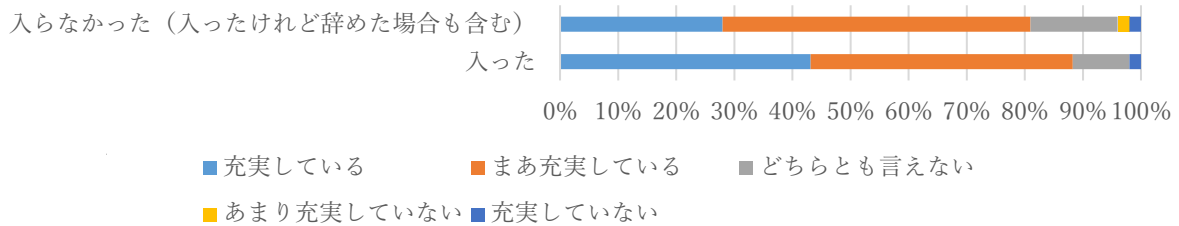


図37

短大・クラブ、サークルの参加と学生生活の充実度



クラブ・サークル活動への参加と学生生活の充実度の関係を見ると、四大、短大ともクラブ・サークルに入っている学生の方が「充実している」「まあ充実している」と回答した学生が多いが（四大 84.3% 短大 88.2%）、短大は参加している学生と参加していない学生との充実度の差は7%程度であるのに対し、四大は24%近い差となった。（図36、図37）

■不安、悩みについて

図38

学生生活の中でどのようなところに満足しているか ※複数回答可

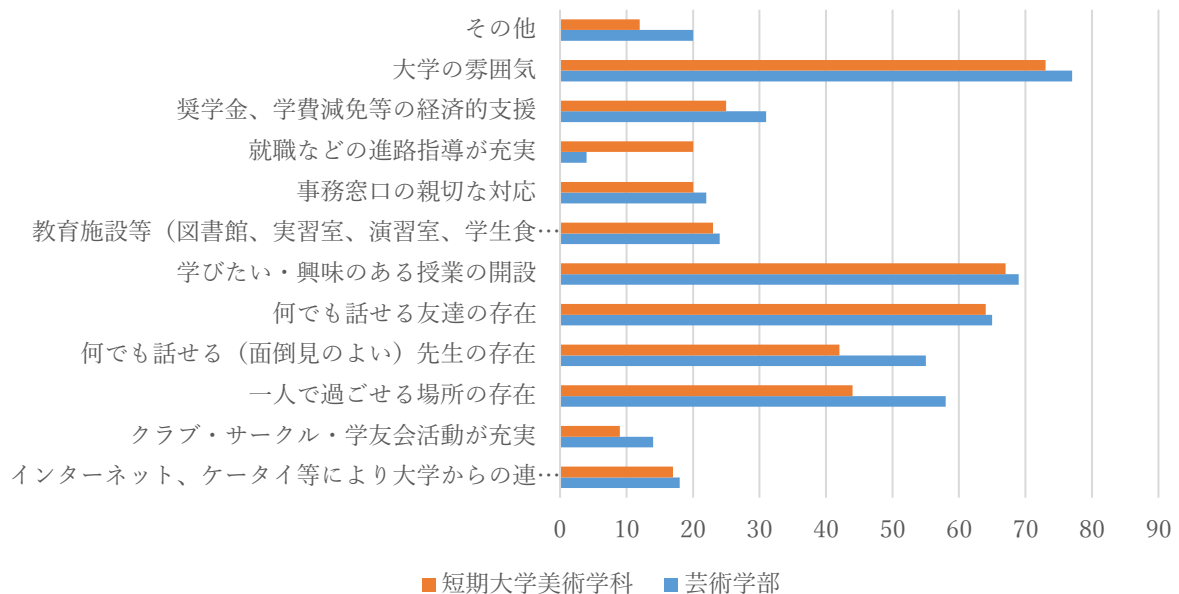
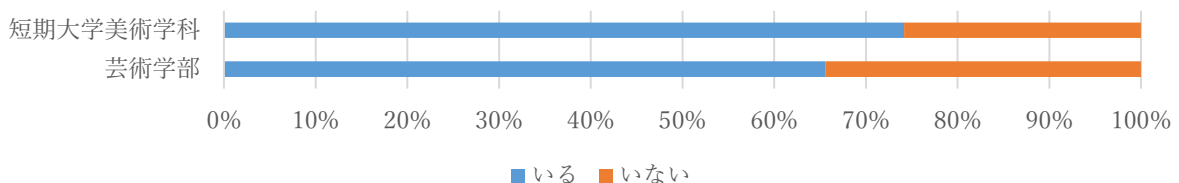


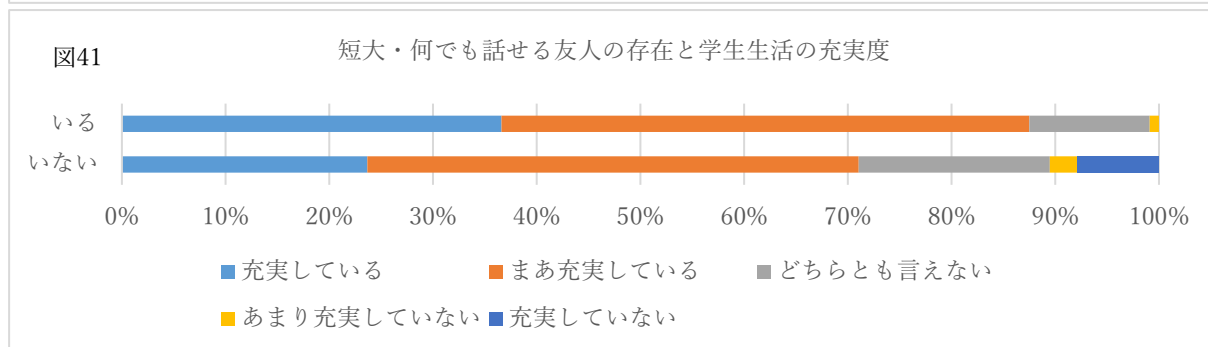
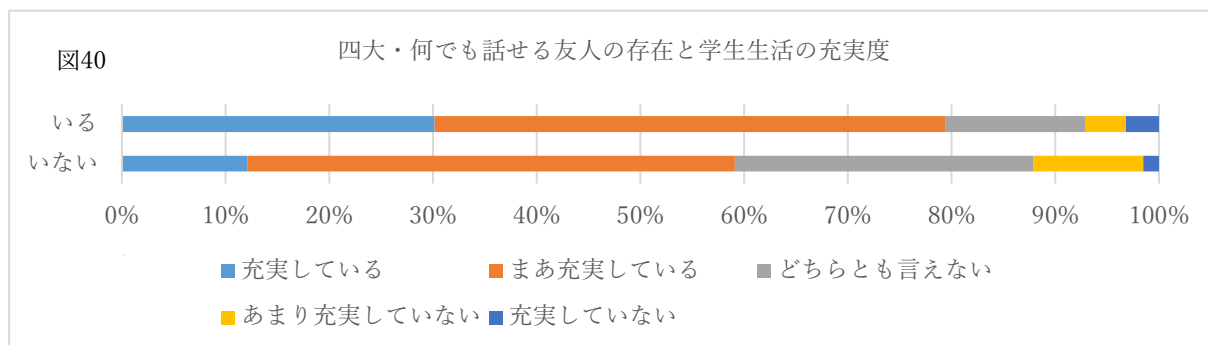
図39

何でも話せる友人がいるか

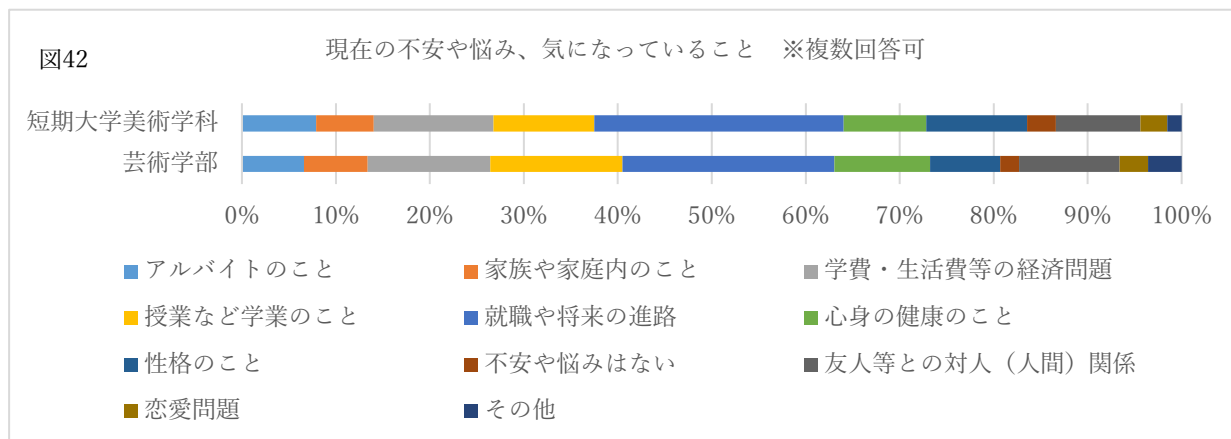


「学生生活のどのようなところに満足しているか」という質問に対し、「何でも話せる友達の存在」は四大（14.2%）、短大（15.4%）とも3位にあがっている。（四大、短大とも1位は「大学の雰囲気」、2位は「学びたい・興味のある授業の開設」）（図38）

では、「何でも話せる友人がいるか」という設問には、四大で65.6%、短大は74.2%が「何でも話せる友人がいる」と回答した。（図39）



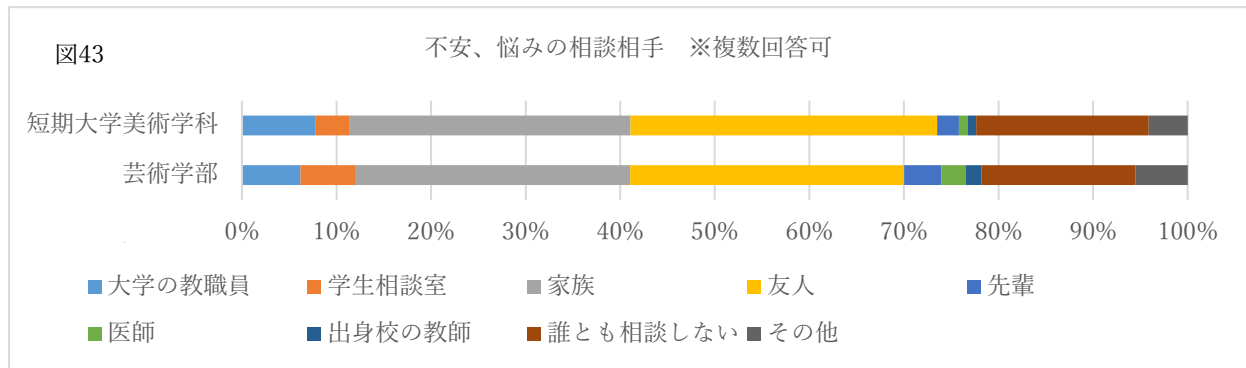
「何でも話せる友人がいる」と回答した学生のうち、四大では 30.2%、短大では 36.6%が学生生活が「充実している」と回答している。それに対して、「何でも話せる友人がいない」と回答した学生で、学生生活が充実していると回答したのは四大では 12.1%、短大では 23.1%となった。ポイントの差は四大の方が大きい、学生生活の充実度に「何でも話せる友人」の存在は大きいと考えられる。



「不安や悩みはない」と回答した学生は、四大で 2.0%、短大で 3.0%しかなく、ほとんどの学生がなんらかの不安や悩みを抱えている結果となっている。（図 42）

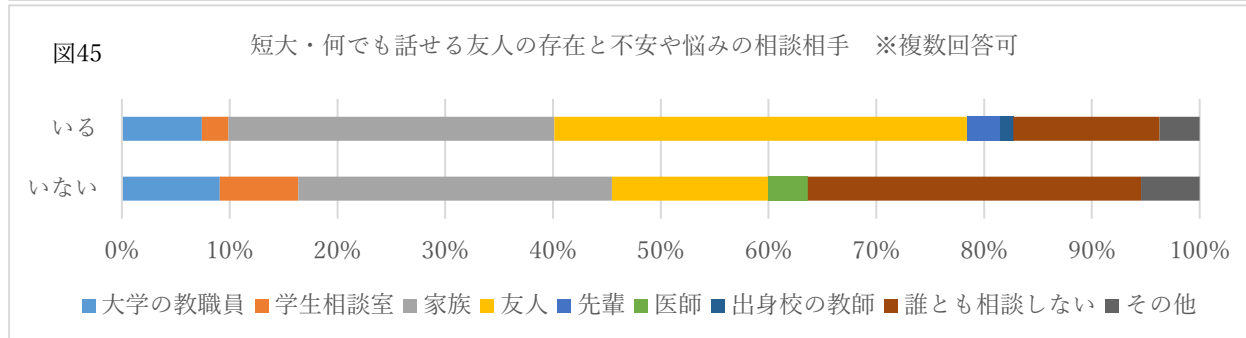
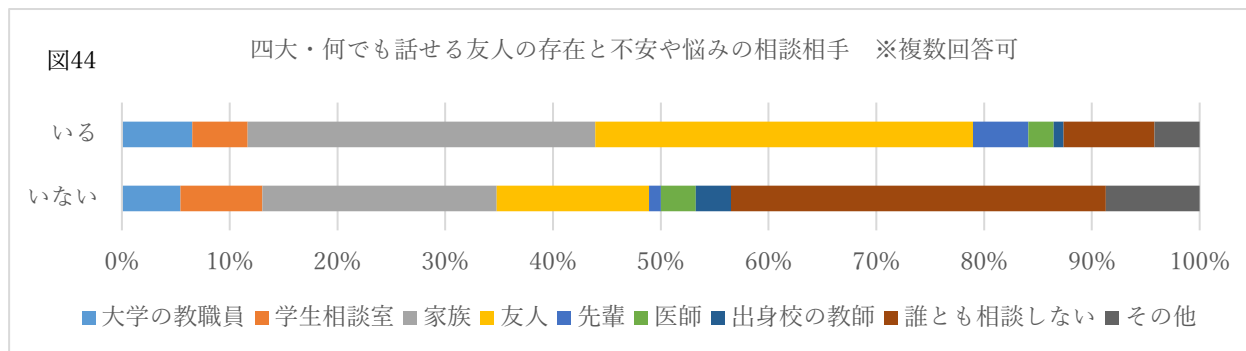
不安や悩みの 1 位は四大、短大とも「就職や将来の進路」（四大 22.5%・短大 26.5%）、四大の 2 位は「授業など学業のこと」（14.1%）、3 位は「学費・生活費等の経済問題」（13.1%）、短大の 2 位は「学費・生活費等の経済問題」（12.7%）、3 位は「授業など学業のこと」（10.7%）となっている。（図 42）

「私立大学学生生活白書 2015」でも、1 位は「就職や将来の進路」（46.1%）、2 位は「授業など学業の事」（22.8%）、3 位は「友人等との対人関係」（16.8%）（本学では四・短とも 4 位）、4 位は「経済問題」（12.3%）で、ほぼ同じ項目が上位であった。



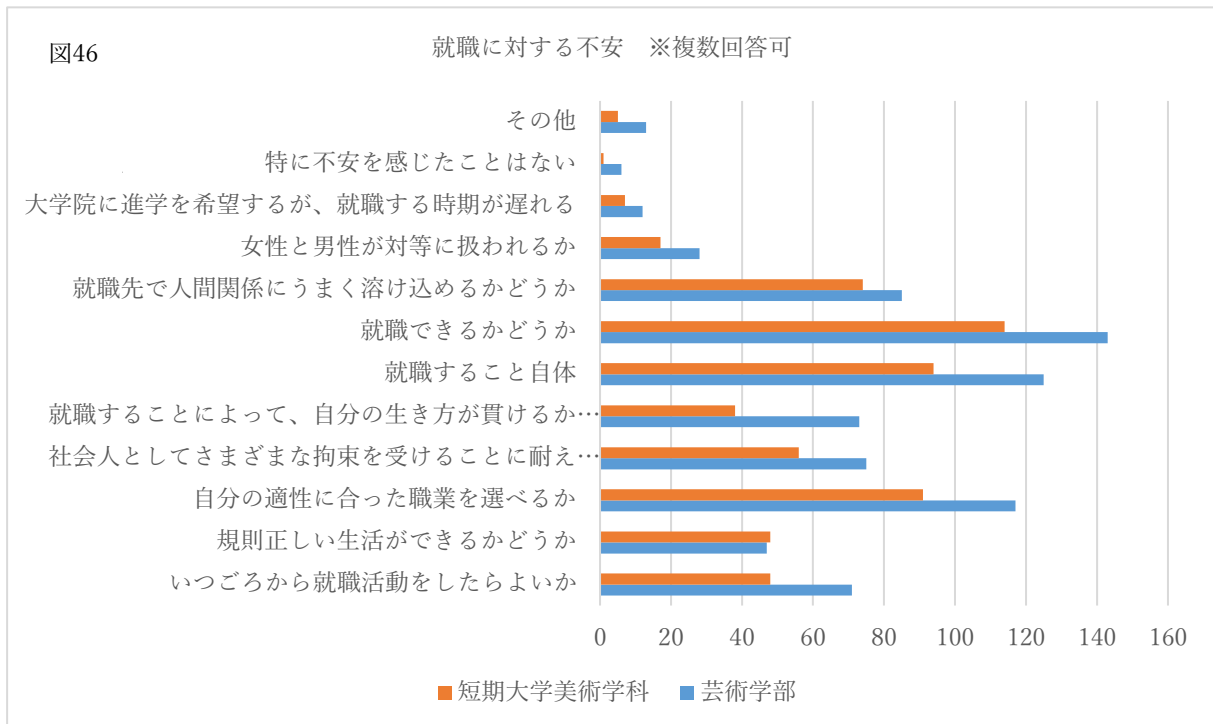
不安や悩みの相談相手の1位は四大、短大とも「友人」(四大 29.0%、短大 32.4%)で、次に「家族」(四大は同率1位で 29.0%、短大 29.7%)と続き、3位は「誰とも相談しない」(四大 16.3%、短大 18.3%)となった。(図 43)

不安や悩みとして就職や将来、学業のことがあがっているにもかかわらず、悩みの相談相手として「大学の教職員」は四大で 6.1%、短大 7.8%、「学生相談室」は四大で 5.9%、短大 3.7%である。この傾向は「私立大学学生生活白書 2015」でも同様で、大学が相談相手として活用されていおらず、改善の余地があると考えられる。

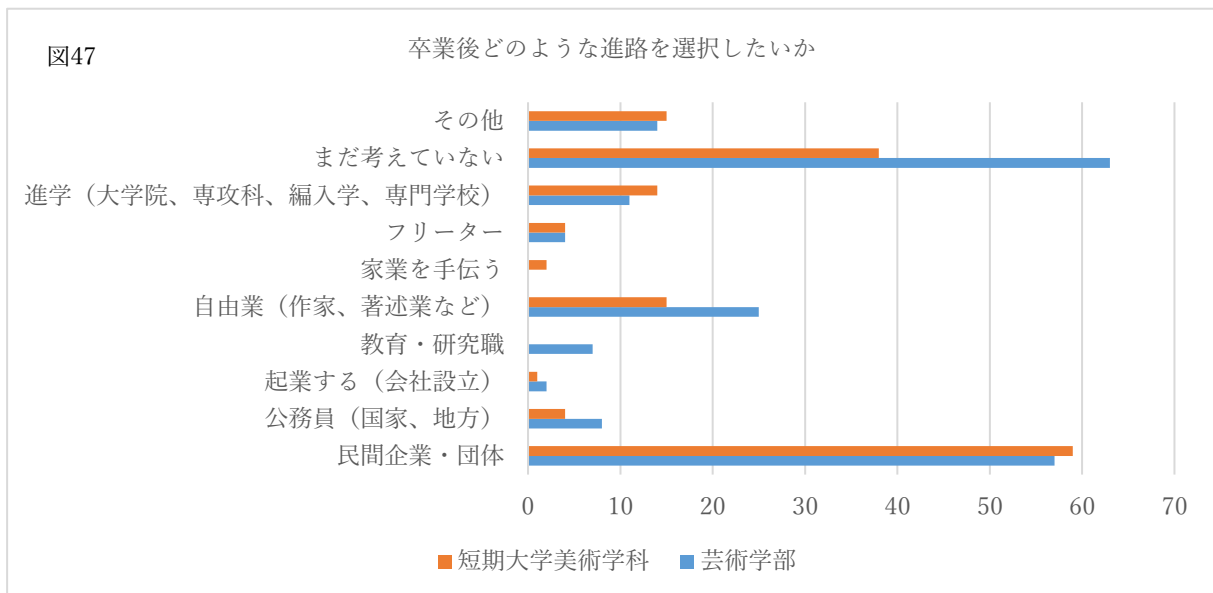


また、「何でも話せる友人がいる」と回答した学生は、相談相手の1位は「友人」(四大 34.4%、短大 37.0%)、2位は「家族」で(四大 31.8%、短大 29.2%)、3位「誰とも相談しない」(四大 8.3%、短大 13.1%)となっている。一方「何でも話せる友人がいない」と回答した学生は、「誰とも相談しない」(四大 34.0%、短大 30.0%)が1位である。2位が「家族」(四大 21.3%、短大 28.1%)、3位「友人」(四大 13.8%、短大 14.0%)と続くが、一人で不安や悩みを抱えている学生の姿が想像される。

■進路・就職について

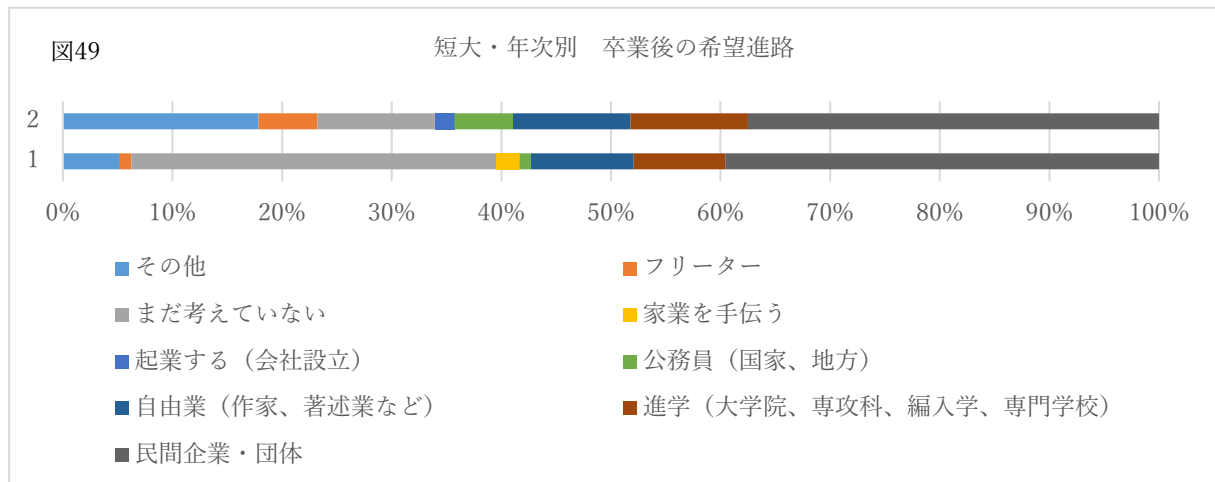
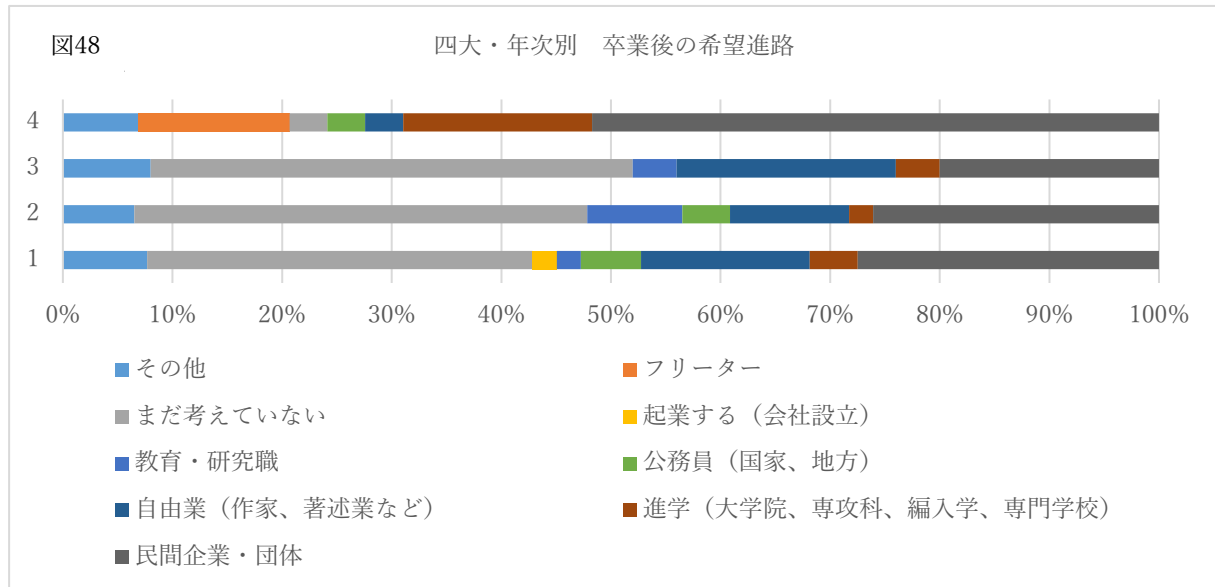


就職への不安についての回答は、上位3項目は四大、短大とも共通して1位は「**就職できるかどうか**」(四大18.0%、短大19.2%)、2位「**就職すること自体**」(四大15.7%、短大15.9%)、3位「**自分の適性に合った職業を選べるか**」(四大14.7%、短大15.3%)となった。この3項目は「私立大学学生生活白書2015」でも同様に上位3項目となっており、本学とは2位と3位が逆ではあるが、大学生共通の不安であることが明らかとなった。(図46)



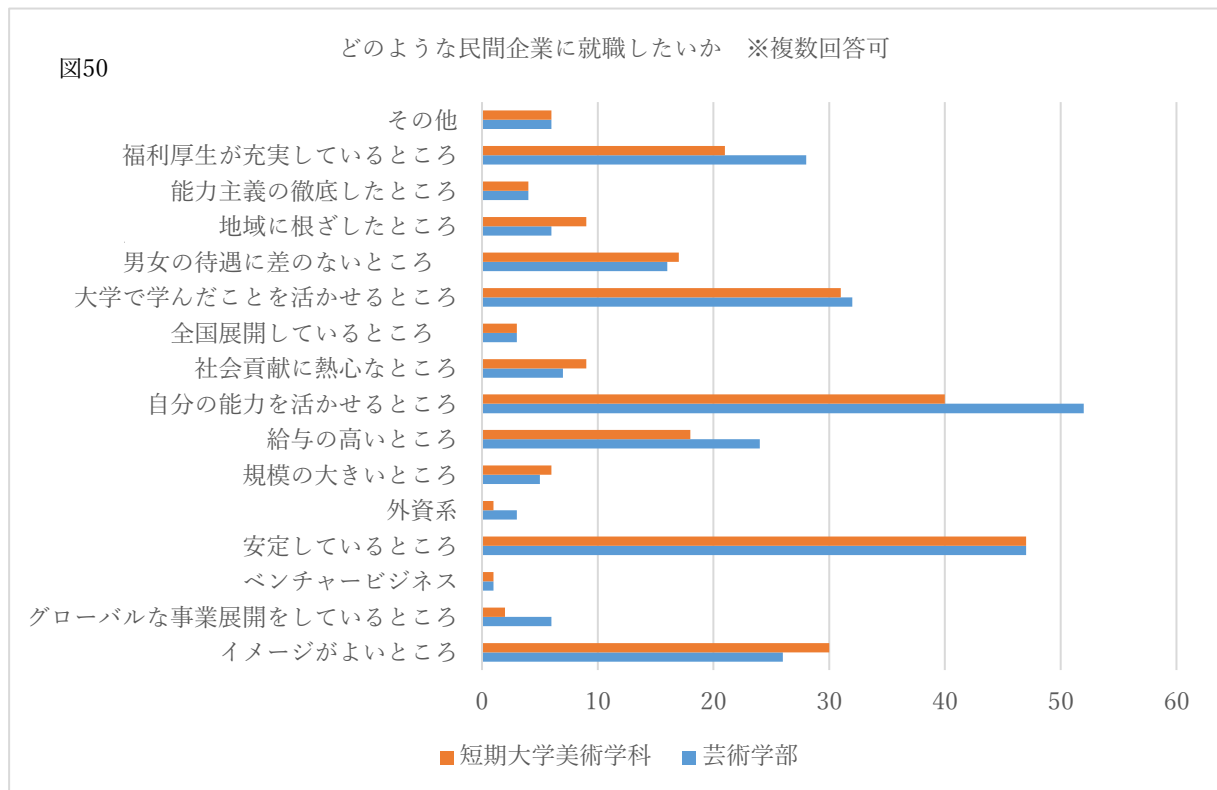
希望進路は、四大1位「**まだ考えていない**」、2位「**民間企業・団体**」、3位「**自由業(作家・著述業など)**」、短大は1位「**民間企業・団体**」、2位「**まだ考えていない**」、3位「**自由業(作家・著述業など)**」となった。「私立大学学生生活白書2015」では、1位「**民間企業・団体**」、2位「**公務員**」、3位「**専門職(医師・弁護士・税理士・設計士など)**」となっており、「**自由業(作家・著述業など)**」の順位が高く、公務員希望が少ないのは、本学の特徴といえる。(図47)

四大の 1 位、短大 2 位が「まだ考えていない」であるが、回答者の年次分布をみると四大、短大とも 1 年次生が多い。四大の 1、2 年次生、短大の 1 年次生はまだ現実的な問題ととらえていないため、この結果になったのではないかと考えられる。



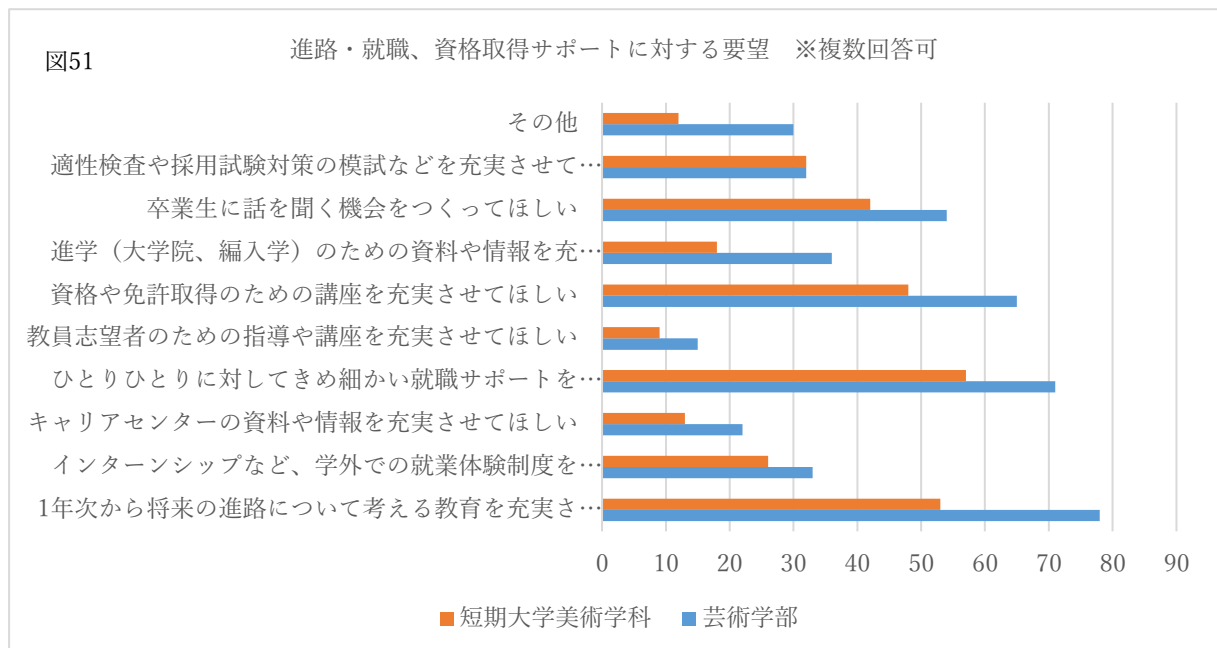
そこで、年次別にみると「まだ考えていない」と回答した四大の 4 年次生はわずか 3.4%、短大の 2 年次生は 10.5%である。しかし、四大の 3 年次生の 42.3%が「まだ考えていない」と回答している点は看過できない結果である。（図 48、図 49）

また「自由業（作家・著述業など）」を希望する学生は、四大では 1 年次から 3 年次までは 15%～19%いるのに比して、4 年次になると 3.4%まで減少している。一方短大では 1 年次 9.3%、2 年次 10.5%で四大ほど大きな変化はなく、むしろ 2 年次生で増加している結果となった。



希望進路の1位である「どんな民間企業に就職したいか」という問いに対して、四大の1位は「自分の能力を活かせるところ」、2位「安定しているところ」、3位「大学で学んだことを活かせるところ」となり、短大は1位「安定しているところ」、2位「自分の能力を活かせるところ」、3位「大学で学んだことを活かせるところ」となった。1位と2位は逆になっているが四大と短大の上位の項目は共通している。(図50)

「私立大学学生生活白書 2015」では、1位「安定しているところ」、2位「自分の能力を活かせるところ」、3位「給与の高いところ」が上位3項目で、2010年調査でも同様の結果であったと報告されている。3位の「給与が高いところ」は、本学では四大で6位、短大でも6位で、本学の3位「大学で学んだことを活かせるところ」は、「私立大学学生生活白書 2015」では6位である。



進路・就職、資格取得サポートに対する要望についての回答は、四大の 1 位「1 年次から将来の進路について考える教育を充実させてほしい」、2 位「ひとりひとりに対してきめ細かい就職サポートを行ってほしい」、3 位「資格や免許取得のための講座を充実させてほしい」であった。

短大の 1 位は「ひとりひとりに対してきめ細かい就職サポートを行ってほしい」、2 位「1 年次から将来の進路について考える教育を充実させてほしい」、3 位「資格や免許取得のための講座を充実させてほしい」となっており、1 位と 2 位の順位は逆であるが上位 3 項目は共通した結果となった。(図 51)

■アンケート結果概要

▽進学理由・充実度

本学を進学先に選択した理由は、四大、短大とも「学びたい専門分野・授業科目があるから」と積極的な理由が 1 位であるが、全国的な傾向と同様に「自宅から通学できるから」が四大 3 位、短大 2 位となった一方で、「京都にある大学・短大だから」（四大 3 位、短大 2 位）のポイントが高く、「京都」のブランド力が高いことが明らかになった。

また、所属学部・学科の満足度、学生生活の満足度は四大、短大とも比較的高く、授業内容に満足し学生生活の満足度が高い学生は、所属学部・学科への満足度が高いという結果であった。

学生生活の中で改善してほしいことについては、「大学からの連絡事項等の情報提供の在り方」「教育施設等の充実」が上位であったが、大学の施設・設備等の満足度は四大と短大では大きく差があり、四大では「大変満足」「満足」が約 40%程度であるのに対し、短大では 67%が「大変満足」「満足」と回答している。

▽経済状況

四大、短大とも学生の約半数が（四大 46.6%、短大 52.3%）が経済的に「苦しい」「やや苦しい」と回答しており、約 65%がアルバイトをしている。目的の 1 位は四大、短大とも「欲しいものを購入したり、遊び、旅行、趣味などにあてる」であるが、四大の自宅外通学の学生の 1 位は「主に生活費、学費などにあてる」であり、生活のためにアルバイトをしている学生も多いことが判明した。

▽正課教育

本学の正課教育の「教授陣」「カリキュラム構成」「授業内容」「ゼミなどの少人数教育」「施設・設備」の 5 項目の満足度は、四大と短大で大きく違った結果となった。短大においては、5 項目とも「大変満足」「満足」と回答した学生が 60%を超えているのに対し、四大は 60%を超えた項目は 1 つもなく、「大変満足」「満足」と回答した学生は、「教授陣」52.3%、「カリキュラム構成」32.8%、「授業内容」38.9%、「ゼミなどの少人数教育」51.9%、「施設・設備」40.0%で、いずれの項目も「どちらとも言えない」とする学生が多数を占めた。また、「教育内容や方法に対する要望」では、四大、短大とも「多様な科目選択ができるカリキュラム」と「シラバスの充実」が上位項目となった。

この結果は、毎年度（前期・後期）実施している「授業評価アンケート」で得られる「満足度評価」や「シラバス評価」とは乖離しており、どのように判断すべきか検討が必要である。

▽正課外活動

本学の学生のクラブ・サークル活動への参加率は全国平均に比較すると低く、「クラブ・サークルに入らなかった理由」の 1 位は「時間を束縛されたくない」である点が特徴的である。ただし、

クラブ・サークル活動に参加している学生の方が、参加していない学生に比して、学生生活が充実していると感じている。

▽不安、悩みについて

ほとんどの学生が、何らかの不安や悩みを抱えて学生生活送っている。不安や悩みの上位は「就職や将来の進路」「授業など学業の事」「学費、生活費等の経済問題」である。就職や将来の事、学業の事に悩んでいても、相談する相手は「友人」「家族」であるか、「誰とも相談しない」で、大学の教職員や学生相談室を活用する学生は少数である。また「何でも話せる友人がいない」と回答した学生は「誰とも相談しない」が四大、短大とも 30%以上となっている。

▽進路・就職について

就職に対しては四大、短大とも「就職できるかどうか」「就職すること自体」「自分の適性に合った職業を選べるか」といった不安を感じており、「1 年次から将来の進路について考える教育を充実させてほしい」「ひとりひとりに対してきめ細かい就職サポートを行ってほしい」「資格や免許取得のための講座を充実させてほしい」というサポートを要望している。ただ、卒業後の進路について、四大の 3 年次生、短大の 1 年次生は「まだ考えていない」と回答する学生が多く、アンケート調査が 11 月～12 月であったことを考えると、もう少し早い時点で将来の進路について考えさせる必要があるのではないかと考えられる。

「学生生活アンケート」は、2011 年度に実施して以来 6 年ぶりである。回収率は 40%程度ではあるが、学生の生活実態や要望を数値として把握できたことは有意義である。今回のアンケート結果により明らかになった課題を今後の学生支援体制の改善に生かすとともに、この結果を基礎資料として継続的にアンケートを実施し経年的に評価することが重要であると考ええる。

嵯峨美術大学・嵯峨美術短期大学

2018（平成 30）年度 自己点検・評価報告書
2019 年 5 月 15 日発行

編集 嵯峨美術大学・嵯峨美術短期大学

自己点検・評価委員会

発行 嵯峨美術大学・嵯峨美術短期大学

〒616-8362 京都市右京区嵯峨五島町 1 番地

TEL (075) 864-7858